津波発生及び来襲時の音響
ーその1　明治三陸大津波時の分類ー

首藤伸夫*

1. はじめに

古くから，津波の来襲直前に激しい音響が発生することは記録に残されている。しかし，地震発生時，音響発生時，被害をもたらす津波本体の来襲時との間には，記録によっては差があり，発生原因は必ずしも同一とはいえないようである。ここでは，明治三陸大津波の記録を整理して，音響発生原因の分類を試みる。また，最近の数値計算によるこの津波の再現結果を参照して，沿岸近くで発生したと推定される音響の説明が可能か否かをも検討する。

何しろ，一世紀程も前の津波であるから，信頼の置ける資料は乏しく，多くは当時の風俗画報のような読物に頼らざるを得ない。特に発生時刻に関しては，判断が難しい。

以下に引用する文献の番号（[　]でしめす）は，主要な関連部分を採録した付録中の番号である。

2. 明治三陸大津波発生時の地震と津波

当時の記録のうち，地震や音響に関する総合的な記述は，付録［30］以下に抜粋してあるが，それより地震に関するものを風俗画報臨時増刊　海嘯被害録中巻により示すと，次の通りである［31］。

「三陸地方地震津浪に附き地質学上の考説
理学博士　巨智部忠承　稿
三　地震の数　宮古町

発震時間	震動
午後七時三十二分三十秒	微　潰屋あり

（時間　五分　　方角　東北東　西南西）

発震時間	震動	
午後七時五十三分三十秒	微	海嘯あり
同　八時〇二分三十五秒	同	続震あり
同　八時二十三分十五秒	同	同
同　八時三十三分十秒	同	同
同　八時五十九分	同	同
同　九時三十一分三十秒	同	同
同　九時三十四分〇五秒	同	同
同　九時四十五分四十秒	同	同
同　九時五十分十秒	同	同
同　十時三十二分十秒	同	同
同　十一時二十二分	同	同
同　十一時三十三分十五秒	同	同

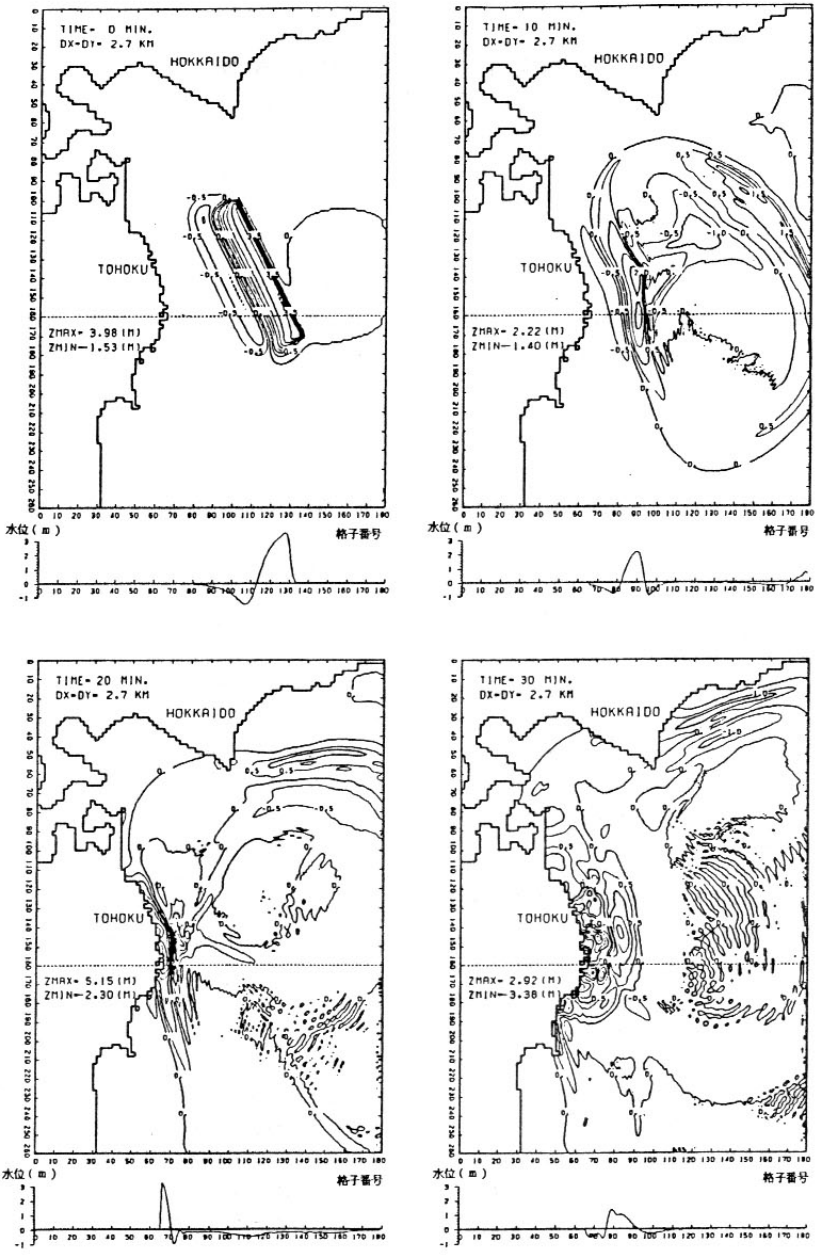
宮古測候所報六月十九日官報

備考　以上合計十三回の地震ありしも執も微弱震に過ぎざりし然れども七時五十分頃海潮は異常なる速力を以て干退し同時に遠雷の如き洪響を聞くや八時頃に至り海嘯襲来し一旦引退せしが八時〇七分再び畏るべき海嘯は一丈四五尺の高さを以て捲き来り人畜家屋を一掃し去り爾後六回の海嘯襲来したるを見たり而して波動は翌日正午頃まで続きしもそは左まで強勢にあらざりしと云ふ

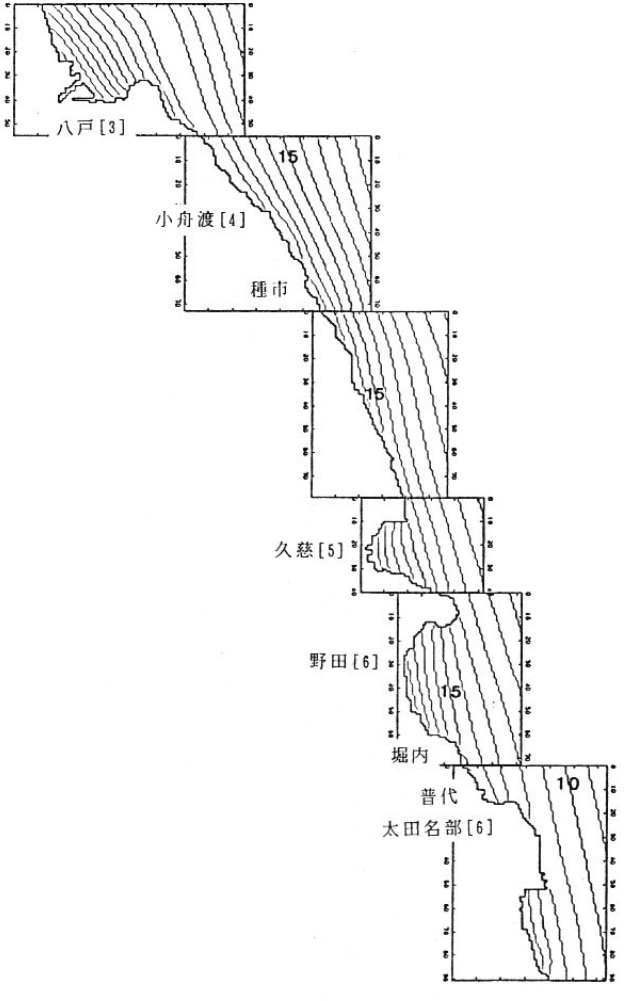
同　測候所長談話」

津波シミュレーションによる外洋での平面的な伝播状況を，10分毎に図－1－1に示す。各図の下の断面図は平面図に於て東西に示す点線部分での波形断面を示すものである。津波の先端は発生より10数分して三陸沿岸に到達する。津波先端の位置を三陸沿岸に対して詳しく示したのが，図－1－2，3，4である。図－1－2は，青森県八戸から岩手県普

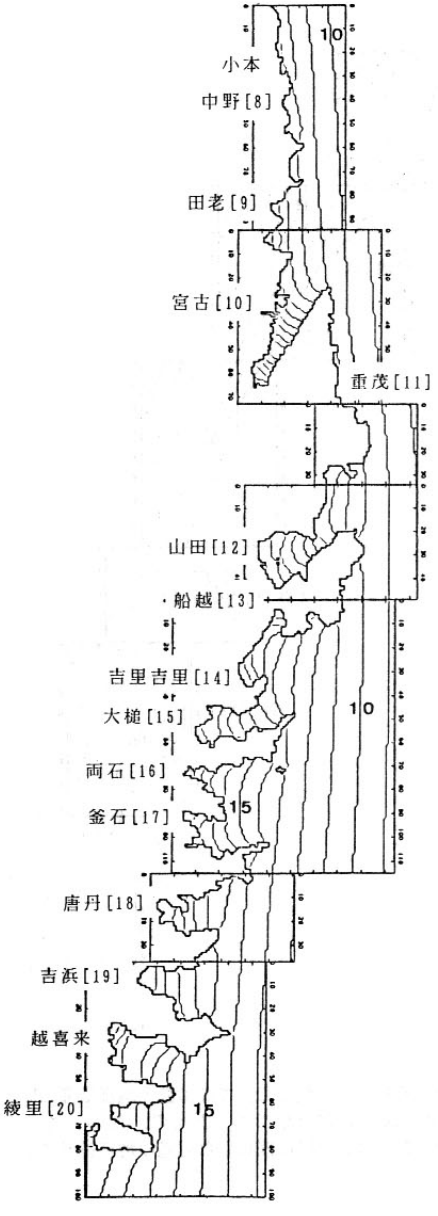
*東北大学工学部土木工学科



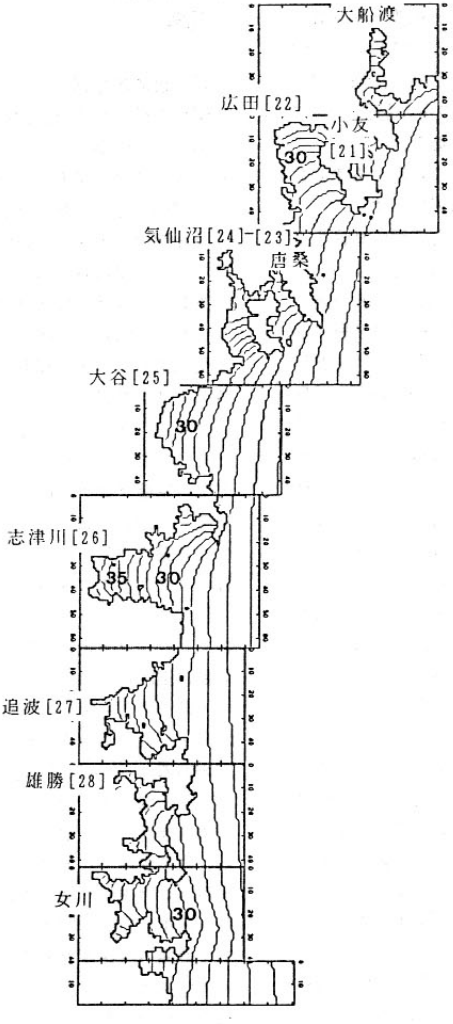
図－１－１　明治三陸大津波の数値シミュレーションによる水位分布
発生時（左上），発生後10分（右上），20分（左下），30分（右下）



図－1－2　三陸沿岸（八戸より普代まで）での津波先端部伝播時間
数字は発生後の時間を分で示したもの。なお，地名の後ろの
［　］内の数字は，付録に採録した記述の地点番号である。



図－1－3　三陸沿岸（小本より綾里まで）での津波先端部伝播時間
数字は発生後の時間を分で示したもの。なお，地名の後ろの
［　］内の数字は，付録に採録した記述の地点番号である。



図－１－４　三陸沿岸（大船渡より女川まで）での津波先端部伝播時間
数字は発生後の時間を分で示したもの。なお，地名の後ろの
［　］内の数字は，付録に採録した記述の地点番号である。

代迄，図－１－３は，岩手県小本から綾里まで，図－１－４は，岩手県大船渡から宮城県女川までとなっている。この間で最も早く津波先端が到達するのは，岩手県山田湾の湾口の辺りで，北のトドヶ崎や南の霞露ヶ岳では，発生より約10分の後である。

以上の宮古測候所の記録に対応する津波数値計算の例をやや詳細に以下に示す。

宮古湾でみると，湾口の南の岬に到達するのが11分後，鍬ヶ崎や宮古にはその４－５分後，湾奥には更に８分後である。第一波のピークは先端より約５分程度遅れて来襲する。

図－１－５は，宮古湾内各点での計算波形を示したものである。この計算は種々の異なった条件を想定して行なわれているが，その内の破線が明治三陸大津波当時の状況を想定し，しかも浅水理論を使用し，かつ計算格子間隔を50mとした精度の良いものである。従ってここでの目的のためには，破線で与えられる時間波形について議論すれば良い。藤原地点は宮古市を流れる閉伊川の河口の南側である。21分頃から引き始め，30分に第一の退潮となり，ついで33分に第一波のピークが襲来している。第二波のピークはそれより遅れること24分位である。

宮古測候所の報告では，津波の引き始めは第一の地震の約20分後，第一波ピークの襲来は30分後であるから，計算結果はほぼ妥当であるといえるが，第二波ピークの襲来は第一ピークの７分後であるから，かなり相違している。詳細にわたる波形の再現性が悪いことは，現在の数値計算の最大の問題点である。その原因は主として計算の出発点となった初期波形に問題がある事である。地震波から断層運動を推定する現在の手法においても，主要な地盤変動しか決めることはできず，時として津波としては重要な副断層の効果を見積ることが出来ない。明治三陸大津波のように，最大打ち上げ高の分布を使って試行錯誤で求める場合には，なおさら初期波形の高低の微妙な分布を推定する事は不可能である。

3. 音響に関する当時の総合的な記述と見解

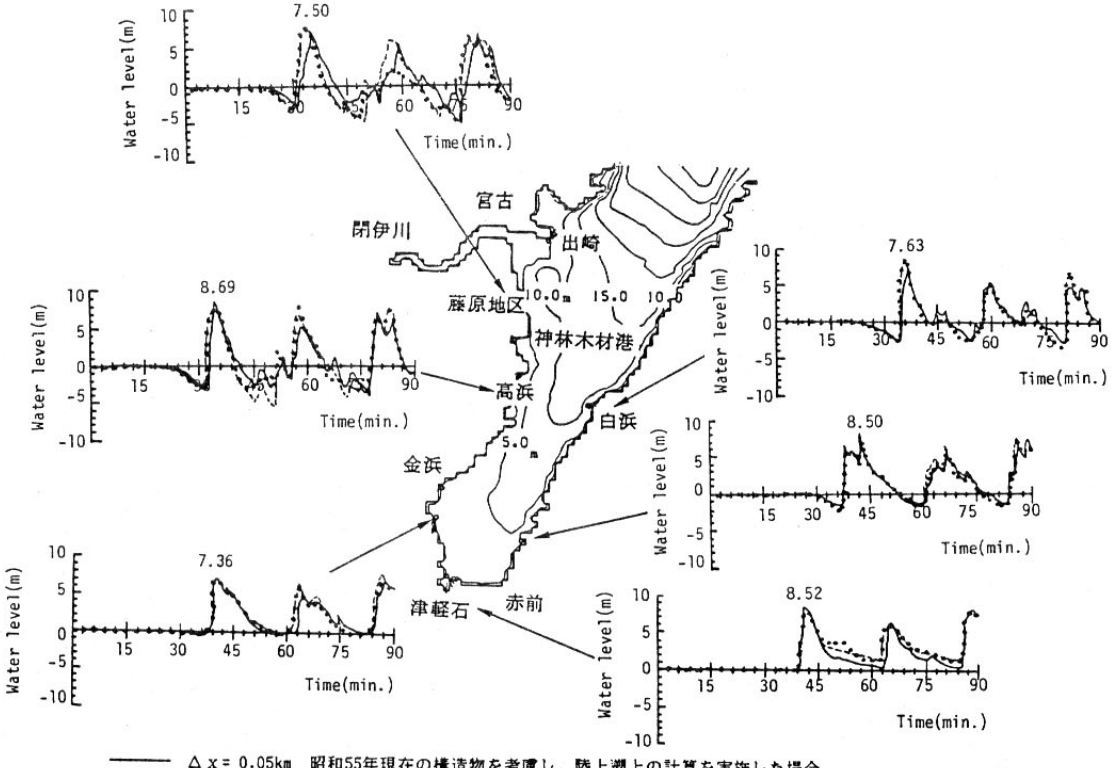
災害後に現地調査した伊木の報告中に音響に関する部分があり，次の通りである［36］。

「第二節　音響

被害地ノ多クハ津浪前ニ当テ二三回ノ速砲若クハ雷鳴ノ如キ音響ヲ聞ケリ，然レトモ其方位及ヒ津浪ニ先タツノ時間ニ在テハ随所各差異アリ，即宮城縣下本吉郡以南ノ地方ニ於テハ東北ノ方位ニ鳴響ヲ聞キ其時間ハ津浪襲来ニ先ツ事大概ネ数分内外ニシテ，岩手縣陸前国気仙郡沿岸ニテハ鳴響アルト同時ニ津浪押寄セ来リシヲ以テ里人皆洪浪ノ岩峭ニ激スルノ音ナリト云ヘリ，尚北位陸中三閉伊郡，南北九ノ戸郡地方ニ於テハ津浪ニ先ツ少時東南方位ニ鳴響ヲ聞ケリ而此音ハ遠ク北上川沿道ノ地，山形，秋田ニ至ル迄聞エタリト云フ

今此音響ナル者ヲ察スルニ今回ノ津浪ハ気仙郡ニアツテ正東ヨリ襲来シ其以南ハ東北方ヨリ以北ハ東南ヨリ来タリシ事ハ後章ニ説クガ如クシテ，之ヲ地形ニ照ラセバ三陸沿岸中気仙郡白濱附近ヨリ南閉伊郡宮古附近ニ至ルノ地ハ最モ東方ニ突出シ陸前本吉以南及ヒ陸中北閉伊郡九戸郡地方ハ漸次西方ニ偏ス（第十四図参看），故ニ波浪前述ノ方向ニ襲来スルトキハ白濱宮古一帯ノ地ニ先ツ激衝シ南北ニハ漸次遅延スルハ明かナル理ナリ，而シテ気仙，南閉伊地方ニ於テハ鳴響ハ津浪ノ襲来ト同時ニシテ夫ヨリ南北両地ノ人ハ各之ヲ東北及ヒ南東ノ方位ニ聞キタルヲ見レバ，音ノ空中ヲ傳播スル速度ハ波浪進行ノ速度ヨリ遥カニ大ナル者ナルヲ以テ全ク洪浪ガ気仙南閉伊地方ノ沿岸ニ激スルノ音ナリシナルベシ，且ツ各地ニ於テ聞タル音響ノ回数ト洪浪ノ襲来ノ回数ト一致スル事，及ビ海洋遥カノ沖合ニ漁セシ者ハ多く其音響ヲ陸地ノ方位ニ聞ケリト云フヲ以テモ之ヲ證スルニ足ルベシ

此他陸前国石ノ巻，荻ノ濱，大原，雄勝，細浦等ニ於テ當日午後三時頃二回遠雷ノ如キ鳴響ヲ聞ケリト云ヘド，其區域モ三陸中南方ニ



図－１－５　宮古湾内各地点における明治三陸大津波数値計算波形

限リ浪勢モ亦弱キ地方ナレバ，若シ今回津浪ノ原動力ニ依テ起リタル音響トセバ此地方ノミ之ヲ聞クノ理ナカルベシ，當日ハ朝来ヨリ曇雨朦欝タル日ナリシヲ以テ或ハ真ノ雷鳴ナリシナランカ」

伊木は音響の原因として津波が岩壁海岸に衝突することを上げている。また，当時の宮城県海嘯誌には著者は不明であるが，次のように記述されている［38］。

「第一章　災害篇

第一　海嘯ノ景況

――

七（海嘯ノ音響）海嘯ノ来ルヤ其前凡ソ十分時（短キハ五分ト云ヒ長キハ五十分ナリト云フモノアリ）東方ニ當リ一種異様ノ大ナル音響ヲ聞クコト数回（二回ナリトモ云ヒ三回ナリトモ云フモノアリ）而シテ又其音響ハ人ニ依テ感スル所各異ナリト雖トモ約ネ左ノ数種ニ出テス

一，巨砲ヲ續發セルカ如シ

二，雷鳴ノ如シ

三，高山ノ崩ルヽカ如シ

四，強風ノ吹キ来ルカ如シ

五，数艘ノ汽船疾走シ来ルカ如シ

六，遠ク汽車ノ進行スルカ如シ

右ノ如ク各自ノ云フ所一様ナラスト雖トモ中ニ就キテ第一種ノ発砲ナリト思惟セルモノ最モ多ク雷鳴ナリトセルモノ之ニ次ク蓋シ當夜ハ陰雲四ニ塞カリ絶ヘス降雨アリシカ為メ斯クハ思惟セルモノナラン歟而シテ此音響ハ果シテ何處ヨリ来レルモノカ人或ハ地震ノ響ニテモアリシカ如ク想像シ之ヲ以テ海嘯ノ前兆トナスモノアリ然レトモ想フニ這ハ震響ニモアラス亦前兆ニモアラスシテ高浪空ヲ衝キ轟々拏々トシテ来リシ音響ニテ其中或ハ他ノ海岸ヲ衝キ汀涯ヲ崩シ屋舎ヲ壊リタル凄マシキ音響亦混同シタルナラン歟何トナレハ音響ノ回数ト海嘯襲来ノ回数ト畧ホ一致スルノミナラス海上ニ出漁セシ者ハ多ク其音響ヲ陸地ノ方面ニ聞ケリト云フヲ以テ之ヲ證スヘケレハナリ而シテ此音響ハ縣下各郡ヲ通シテ巨砲ヲ放テルカ如キ一種ノ鳴動ヲ感セシメタルノミナラス遠ク山形秋田ノ地方ニテモ之ヲ聞ケリト云フ」

風俗画報には，巨智部忠承理学博士の稿として次のように示している［31］。

「四　津浪襲来の状況　六月十五日暮方数回の地震あり午後八時頃東閉伊郡沖合に於て轟然一発巨砲を放ちたる如き轟音あり其音響の歇むや未だ数分時間ならざるに海嘯俄に至り狂瀾天を衝き怒濤地を捲き浩々として驀地に押し寄せ来り市街となく村落となく総て狂瀾汎濫の没する所と為り沿海一帯七十余里僅に一瞬間にして平砂荒涼死屍壊屋の累々たる満目惨憺たらざるなし

――

六　音響の有無　大砲の如き又は遠雷の如き響を聞くも各地皆然り独宮城県志津川於ては之を聞き得しものなしと云ふ日本新聞二四三九号に曰く前略而して彼の他の所にて何れも聞取せしと云ふ大砲様の奇響は独り此志津川に於て聞き得しもの一人だになかりき是頗る奇談たり云々

九　前兆――

宮古に於ける海嘯襲来は前後六回にして初度の襲来は午後八時なり而して之に先だつ十分即同七時五十分海嘯は異常な速力を以て干退し同時に遠雷の如き洪響を聞きたりと――

志津川付近に於ては去る十三日頃より流潮擾乱して定流を変し十五日に至り老人曽て覚えざる程の干潮となり未た曽て見れることなき海底の凹凸を見たり而して其夕八時頃より三回の鳴動或は遠雷の如きもの起れり海嘯の襲来は実に八時十分なりしなり（此の記事中には志津川に音響を聞くとあり孰れか信なるや）」

また具体的な著者は不明であるが，風俗画報下巻には次の記述がある［32］。

「雑聞

○海嘯と音響　今回の海嘯に就ては何處にても音響を聞けり宮城県牡鹿郡にては雷鳴の如き響を聞き歌津村にては砲声の如き音を聞き又志津川町にては大雨に続いて地震あり間もなく雷鳴の如き響きを聞きたり岩手県下久慈港にては当日午後八時半頃に烈風吹起り地震の如く雨戸鳴響き間もなく三四回凄ましき音聞えたり，又釜石町にては晩餐頃海上遥かに凄ましき音せしが其声次第に近づき且つ大砲の如き響き三回程あり人々驚きて海上を見渡すに濃霧一面に立塞かりて呎尺を弁ずる能はず何れも驚き慌てる折しも山なす海嘯襲ひ来りしなりと」

以上の記述をまとめると，当時の人は沿岸に於て波高の大きな津波が海岸に於て発した音響であると考えていたとして良いのでは無かろうか。とくに津波の山の来襲回数と音響の回数の対応を見ていることは，こうした考えを支持するためである。

4. 音響の記述の分類

4.1 音響の種類

音響に関する記述のを引用し，地震の発生時間，津波数値計算より推定できる到達時間，あるいは記述内容を参照して，音の分類を行なう。

引用文の配列は，北から南とする。引用文末の文献番号は付録に示した番号である。

音響は，まず海上で聞いたものと陸上で聞いたものとに大別する。

海上で聞いた音には，発生源が海であるものと陸であるものとの2種類がある。

陸上で聞いた音についての記述は豊富である。

まず，地震時の音で必ずしも津波と直接関係があるわけではない。

次に波の山の来襲に先立つ引き波による音響がある。

波の山の来襲にともなう音響はここでは3種類に分類した。他地点で発生した音，来襲地点で津波の来襲と同時に発生した音，発生源が特定できないもの，である。

音響の発生原因が不明のものもあった。

津波が原因ではあるが，水の運動が音響発生源でない場合が1例あった。これはきわめて特殊なものであり，いつも生ずるとは限らない。

周辺では音響を聞き，あるいは音が発生しているにもかかわらず，音を聞かなかったらしい特異な地点を最後に取りまとめた。

4.2 沖で聞いた音響

4.2.1 海震あるいは地震の音

岩手県宮古湾沖合

「○海嘯の前兆　大災の前兆に就ては確たる原因と認むべき異状なかりしも当日鍬ヶ崎の漁夫等が女遊沖に出で漁業に従事し居たるに沖合に幽に鳴動聞えた」[10－3]——

岩手県大槌湾沖合

「○巨砲を海中に聴く　大海嘯当日大槌の漁師遥かの沖合にて漁業に従事せしが午後六時とも覚しき頃大洋中に於て巨砲の響を聴き——彼の巨砲の如き響こそ海底に大異状ありし時にて大海嘯の原因も茲に在りしならんと震慴せり」[15－2]

岩手県唐丹湾沖合

「海上に命を拾ふ　唐丹の漁夫四十二人漁船三隻に分乗し鰹猟の為め海上遠く出漁し居りしが何か沖合に音響の聞えしやうなりしも別段浪も立たざりし」[18－2]

宮城県気仙沼湾沖合

「午前十時に激響を聞く　海嘯当日——鮪船松魚船等に乗り組み気仙沼沖に掛り居たる漁夫は午前十時頃に於て太平洋上に雷の如く砲の如き激響の起るを聞き，又午後七時に於て激震に接触せり」[20－1]

宮城県志津川湾沖合

「○海上に於ける状況　志津川町の漁夫は海嘯の当日海上に鮪漁をなし居り——午後七時半頃海洋に於て大砲を打つが如き大なる響を発したるより何事なるかと其方角を眺むれ

ば風もなきに海水山岳の如く高まりし」[26－7]

4.2.2　陸地方向の音

青森県階上郡沖合

「小舟渡の漁夫沖合にて漁業し居たるもの一時船の水上に膠せしに驚き怪しと思ふ間に陸地に当り砲声の如きものを聞きたれば直ちに引返し来たりし處夥しく材木の流れ来るに逢ひ始て其海嘯なりし事を知しといふ」[4]

岩手県田老町沖合

「此日同（田老）村の漁夫六十人は十五艘の鮪船に乗りて艮位二里計の沖合に漕出鮪網を曳てありしが陸地の方に当て不思議にも汽車の響きの如きを聞き訝り怪む事大方ならず子細があらんと力を合せ船を陸へと引返す途中三回の大激浪に遭遇せり」[9－2]

「○出漁者の断腸　田老村の内大字乙部に於て該夜四人乗十五隻にて流し網に出たる者あり二里以内丑寅の沖にて網を張り居りし處陸の方にて汽車の走るに似たる音せり浪は至極穏なれども兎に角網を引上げて帰る途中大浪に出逢ふこと三回同時に流木夥しく来たり始めて海嘯なることを知り港口に来たりたれど浪高くして入るべからず」[10－4]

岩手県陸前高田市広田町

「広田村小西幸太郎なる者の直話によれば同人は海嘯の当日沖に在りて漁を為し居たるに陸地の方に当りて只ならぬ物音聞えしにぞ異変あらんとて急ぎ帰途に就きたるに向ふの方より床板の上に乗りて九十余の老婆波間に浮沈し来りたりさては海嘯かと之を熟視するに豈に図らんや是ぞ己が祖母ならんとは」[22－1]

4.3　地震時の音響

北海道十勝郡

「六月十五日午後八時十勝国茂寄村海面沖合ニ於テ遠雷ノ響クガ如キ音響ト共ニ微震アリ，其振動ニ比シ地響長ク且ツ大ニシテ殆ント五分間ニワタリ」[2]

宮城県本吉郡大谷村

「大谷村字平磯――六月十三日ヨリ同十五日海嘯襲来当日迄東北ノ方位ニ於テ数回大砲ノ如キ音響ヲ聞キシカ当日音響アリテ凡ソ三十分程経タリト思フトキ海嘯襲来セリ」[25－5]

4.4　退き波時の音響

北海道日高郡

「北海道ノ津浪　日高国幌泉地方――其初ニ當リ海水湧々タル中凄然一種ノ音響ヲ発シ退去スル事十数分間ニシテ数十間若クハ数百間」[1]

岩手県田老町

「○海嘯を見る　小湊の人海岩の高處に在りて異様の波の音を聞くと同時に海潮退くこと三百間余」[9－3]

岩手県宮古市重茂

「○海に水なし　宮古の漁夫にて重茂の小字根瀧といふ所へ鮪網の出稼に赴き居るもの三十二三人あり監督者の高橋治之助は夕飯の際沖合の鳴ること頻りなりければ戸を明て之を窺ひしに不思議々々々海の極て深き處まで一滴の水だになかりしかば扨こそ海嘯に相違なし――治之助が戸を明けて見し時は夥しき漁船の隻影を認めざりしとなり」「[11]

4.5　襲来した津波による音響

4.5.1　他地点の音

岩手県久慈市

「久慈市門前　十五日午後七時頃より軽震一時間許に亘り身体を上下に動揺せらるゝ心地し八時廿分に至り時ならぬ鳴動起り恰も万雷の一時に轟が如く覚ゆるや忽ち叫喚の声，――此時潮水は既に道路田園に浸入し泥濘脚を没する」[5－1]

「久慈市湊　晩暮七時五十分に水平の微動あるを始ととし八時頃に至りて再び動揺あり――凡そ五分にして震動の大なるを感じ――凡八時十分頃忽然戸外庭前に於て「ピストル」を発射したる如き音響――八時十五分頃

となるや東方海岸に当りて俄然鳴動を始め汽船据付の機関振動の如き感あり大ならず小ならず上下一定の微動にして振動愈々益々強きを加へたり依て蹶起して東方の海面を見るに牛島と称する島嶼の方面に当りて大空朦朧として薄赤面を呈し鳴動の方位も同一にして右方々面には此の暴状なし」［5－4］

久慈市門前は海浜よりやや離れた場所であり，浜で生じた音を聞いたものと判断される。

岩手県田老町

「今回ノ如キ洪浪（田老ニテハ約四十八呎）――里人ニ問ヘバ津浪少時前北方ニ當リテ囂々タル音響ヲ聞キシ――田老ノ東北ニ當リテハ真崎遠ク海中ニ突出スルカ故ニ浪ハ他所ニ於ケルガ如ク尚ホ東南ヨリ進来シ先ヅ此岬角ニ激シ囂々ノ音響ヲ起セシモノナラン」［9－4］

岩手県下閉伊郡のうち宮古より北の部分

「午後八時頃東閉伊郡沖合ニ於テ轟然一発巨砲ヲ放チタル如キ響音アリタレトモ沖合ノ鳴動ハ普通ノコト或ハ軍艦ノ演習ナラント信シ更ニ意ニ介スルモノアラサリキ然ルニ其轟音ノ歇ムヤ未タ数分間ナラサルニ海嘯俄ニ至リ」［37］

岩手県下閉伊郡山田町山田

「当日の模様　午後八時半（此地吏員の時間は時計の狂へるにや皆相違せり只聞くがままを記す）の頃大地水平動の軽震を感じて其時間極めて長く而も間断なく九時半頃迄震動したれば尋常の事に非ずと思惟して戸外に出でしに大釜崎（湾口に在り平日波の当る音釜の如く聞ゆ故に名く）の方に当て海の鳴るを聞く然れども平日の音と違ひてゴーゴーと一斉に継続して鳴るゆえ必ずや海嘯なるべしと思ひ」［12］

岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里

「地震より凡そ五分間を過きたと思ふ頃何處となく轟々と鳴り響く音あり初めは石臼の音と思ひたれと追々此音響は近接する――而して轟々の音止まずして益々接近するものの如し遂に戸外を望むこと三回目のとき海上激浪を湧かして白色銀彩あるを見思はず海嘯なりと絶叫せしは已に目前に逼りたる時にして此一刹那海岸にありし家屋は一斉に倒潰して百雷の轟くが如し――先に轟々の音響ありしは疑もなく激浪の湾外の岩石に撞突せし音なり」［14］

岩手県上閉伊郡大槌町大槌湾奥

「大槌町は大槌湾の奥に位し御箱，野島の両岬湾口を約す――

夜の八時頃となれり而して花火は第四発目を打上げ終りぬ折柄沖合に当たりて百雷の一時に落るが如きを聞き人々奇異の想ひを為すうち大地微震を感ずると同時に第二回の海上鳴動を聞きぬ此度は第一回に比して響の高き事数層倍若しや海嘯には非ずやと疑ふ間に果然大海嘯は大山の崩れ来るが如く極めて速やかなる勢を以て襲ひ来たれり」［15－1，4］

「大槌村　○鳴動と進潮　沖合に音響ありし後約五分以上七八分の後海嘯来りしが如しと云ふ」［15－2］

「◎安渡区の小国留助は――義兄富沢虎次郎――の長男鯉三（十一才）と次男英吉（七才）を伴ひ煙火を――英吉を肩に手に鯉三を携へて見物に行きしが間もなく外洋に当りてゴーゴーと凄ましき音せしにぞ留助早くも海嘯なりと察し直ちに件の両児を二渡りといへる高阜へ連れ行き――遂に一命は拾ひ得たり――［15－6］

「山手の方にて「海が鳴出して来たから早く山へ登れ登れ」と呼声ありければ」［15－7］

「◎大槌町役場雇横浜忠蔵氏は当夜（砂賀町）家に在りしが海嘯の音聞くと均しく先つ老幼を四日町（無難の地）に避難せしめ己れも今や戸口を出てんとする時忽ち潮水は戸を蹴て浸入しければ氏は壁を突破り隣家の屋根に這出でし――」［15－8］

岩手県釜石市

「○巡査部長某は海上の鳴動を以て海嘯なりと推測----

○麦畑の中に座し居る帆船小安丸乗組房州人

渡辺某の直話に依れば同人は十五日の夜上陸して宇澤村に在りしに沖合に天地も崩るゝ如き響せしを以て立出で見たるに（八時頃）五六町の間潮水一時に退き砂を現はしたれば奇変あらんを察し大音に海嘯々々逃げろ逃げろと云ひしに聞きたる者は忽ち高台に上りたる間もなく僅か一分間計にて沖合に真黒に山の如く高き浪逆立ちドードーと音して進み来り一面に押寄せたりと」［17－1］

「○海嘯の来りたる区域は　海岸より十二三町にて三之橋際迄なり海嘯の来りたる時は大砲の如き音の聞えしより少しく後にして若し此音を聞きたる時海嘯の来りたるを認むれば或は遁れ得たるやも計られず

○技手身を以て免かる　海岸を距る五町ばかりなる津村と云ふ高台の所にあり――午後八時過と覚しき頃何やらん怪しき響の聞えたれども同日は雨天なれば空気の塩梅にて鉱山通ひの汽車の響くならんと思ひたるが響は益々激しくなりて人の叫び声さへ雑りけるにぞ――汽車と思ぼしき響は鉱山の方に聞えずして却って手近なる海岸の方に聞えたれば偖ては海岸の地の割けて水の湧き出したるならんと思ふ間もなく旅宿の家内は水が来た水が来たとて大騒ぎをなす「［17－2］

「釜石町――折柄不図遥か沖合に当りて轟然雷吼の音を聞きしと均しく市中非常に物騒がしければ這は只事ならずと町長は真先に門外に駆出して当夜の奇災を免れたり警部も継て雨戸推開きて屋前に出つるや遂に潮水に押流され幸に生命には別条なかりしも重傷を負ひたり――」［17－3］

「◎平田區――地震に伴ひ来る海中の鳴動に不思議やと戸を排し出てんとする一瞬間渦く波は学校を押倒して山路の方へ打揚けた――同学校は渺茫たる滄海に瞰み所謂海を枕にすといふの位置に在れば第二回の波にて一塵をも残さず呑却せられしと云ふ」［17－5］

釜石市唐丹湾の付近と思えるが場所不明

「清水峠に差掛りたるに遥かの那辺に当り御どろおどろと鳴り響く声の起りければ――尚彼の目撃談とて後日人に語るを聞くに第一回の濤勢は譬に六丈余に達し第二回は第一回に比し凡そ一丈位は低く又第三回は第一回と甲乙なかりしとぞ」［21］

宮城県唐桑半島東側

「本吉郡唐桑村字大澤――午後八時頃高山ノ崩ルルカ如キ音響ヲ聞キ何事ナラムト部屋ヨリ駈ケ出テ海面ヲ見ルニ櫛形ノ大浪奔騰シテ字館ノ内八幡岬ノ方面ヨリ押シ寄セ来ルヲ認メ或ハ海嘯ナラムト疑ヒ」［22－2］

宮城県唐桑半島西側

「本吉郡唐桑村字小鯖――右救助船ヲ出シタルハ吉田源蔵ナルモノナルカ同夜不意ニ異常ノ音響ヲ聞キ海嘯ナラムト思惟シ小鯖湾ニ繋留シアル鰹船ノ安否ヲ心配ノ余リ雨ヲ冒シテ小鯖ニ至ルヤ――大災アリシコトヲ知リタリ依テ六名カ船ヲ出シテ救援セントスル」［23－3］

「本吉郡鹿折村字鶴ケ浦――当夜雷ノ如キ音響アリ追々近ツキ来ルヲ以テ何事ナラムト戸ヲ開キ海面ヲ見ルヤ此時遅ク彼時速ク激浪空ヲ捲テ襲ヒ来リ潮水忽チ室内ニ溢レ」［24－2］

「気仙沼警察署長 ―― 十五日夜八時三十分，巨砲の音の如きもの轟然として二度迄聞へたり，当地は其後何事もなかりしかば本官等は只遠雷の響とのみ思ひ居たりスルト十時過にもあらん唐桑より一人の男来り「唐桑に水が増しましたと」の報告を得たり――唐桑駐在所巡査の談話によれば当夜の浪は六丈余の高さなり」［24－3］

宮城県気仙沼湾より西側

「本吉郡大谷村大字大谷――午後八時頃頻リニ鳴動アリ最初ハ近所ノ挽臼ノ響ナラン抔話シ居リシカ漸次音響強マリシ故或ハ浪ナラント思ヒ自分ハ坐敷ノ障子ヲ明ケ海上ヲ瞻ルニ変状ナカリシヨリ再ヒ爐邊ニ来ル間モナク潮水浸入シ爐中ノ火ヲ消シ入カハ不審ニオモヒナガラ坐敷ノ間ニ出テ見レハ激浪既ニ厩ヲ浸シ今ヤ居家ヲ襲ハントスル勢」［25－2］

「本吉郡大谷村大字大谷 ―― 午後八時頃

轟々響渡ル音ヲ聞キ単ニ雷鳴ナラムト思ヒ居タルニ稍暫ク経ルモ其音響ノ止マサレハ不審ニ思ヒツヽ戸外ニ出テヽ往来ヲ見ルニ海濱ノ方ヨリ膝丈位ニ水ノ押シ流レ来ル」[25－3]

「本吉郡大谷村字平磯――午後七時過キ雷鳴ノ如キ響アリテ漸次地響烈シクナリシカハ唯事ナラス――海上ヲ見セシメシニ「浪カ来タ」」[25－4]

「本吉郡大谷村字平磯 ――（午後八時過キ）母ニ沖カ鳴動スレハ唯事ナラスト云フテ起サレシ故戸外ニ出テ海上ヲ見ルニ明神崎（平磯濱ノ突出シタル崎）ヨリ内濱ニ前後二重ナル高浪（前浪ハ凡ソ二丈余後浪ハ四丈余）ヲ認メシ」[25－5]

宮城県志津川湾

「清水村　午後八時頃沖合俄に轟然として雷の如き音聞えしにぞ両人は期せずして談話を中止し暫く耳を聳てしに友人は「是りや海嘯じゃ」とて遽だしく立ちければ渡辺も共に飛出でて沖合を眺めたるにこはそも如何に山なす大濤渦巻打て早や眼前に迫り来たり」[26－3]

「清水浜村　当時沖合にて百雷轟く如き声を聞き――戸を開き見れば五丈余なる大浪の寄せ来る」[26－4]

「志津川町の漁夫は海嘯の当日海上に鮪漁をなし居り――午後七時半頃海洋に於て大砲を打つが如き大なる響を発し――海水山岳の如く高まり――山岳の如く高まりたる海水は中間より二つに分れて南北に走り急に潮流烈しくなりしに間もなく南北沿海岸に打当りなる響甚だし」[26－7]

宮城県追波湾

「本吉郡十三濱村大指――雷鳴ニ和シテ汽車ノ進行ニ等シテ音響ヲ聞キ區々ノ憶説ヲナシ居ル一刹那大山ノ一時ニ崩ルヽカ如キ猛勢ヲ以テ大浪打チ上ケ」[27－1]

「追波湾――同湾ナル名振濱ニテハ軍人ノ語ル所ニ依レバ浪ハ東北ヨリ轟々タル音響ヲナシテ襲来シ八系嶋ノ為ニ大ニ勢力ヲ減殺セラレ幸ニシテ被害尠カリシト云フ」[27－2]

宮城県雄勝湾

「雄勝集治監出役所――八時十分とも覚しき頃殷々の声遥に起りて風声雨声交々到るが如き物音を聞く扨は夕立かと思ふ間さへあらせず百瀑の一時に圧下せるが如き勢もて海嘯は監の外構ひを衝倒し」[28－1]

4.5.2　襲来地点で発生した音

北海道十勝郡

「北海道庁の報告に十勝国茂寄地方は十五日午後――十一時退潮時に際し俄然退潮平時より数十尺の差あり忽にして潮勢奔激六十尺乃至百尺の陸地に襲来し凄音を発して去来すること四五回」[31]

岩手県久慈

「久慈市湊　晩暮七時五十分に水平の微動あるを始ととし八時頃に至りて再び動揺あり――凡そ五分にして震動の大なるを感じ――凡八時十分頃忽然戸外庭前に於て「ピストル」を発射したる如き音響――八時十五分頃となるや東方海岸に当りて俄然鳴動を始め汽船据付の機関振動の如き感あり大ならず小ならず上下一定の微動にして振動愈々益々強きを加へたり依て蹶起して東方の海面を見るに牛島と称する島嶼の方面に当りて大空朦朧として薄赤面を呈し鳴動の方位も同一にして右方々面には此の暴状なし――寄州中建設しある数十の納屋小屋轟然破竹の勢を以て壊倒し来たりたれば海嘯なり」[5－4]

岩手県北部

「南北九戸郡役所――八時二十分頃砲声ノ如キモノ二三回ヲ聞クト共ニ百雷ノ一時ニ轟クカ如キ凄マシキ音響ト共ニ数丈ノ波浪襲来シ」[35]

岩手県下閉伊郡小本

「小本村の中なる中野にては沖の鳴るかと思ふ間もなく家屋破壊陥落し然る後海嘯の襲ひ来るを見しと云ふ」[8]

岩手県田老町

「田老　○海嘯を見る　小湊の人海岩の高處に在りて異様の波の音を聞くと同時に海潮

退くこと三百間余明かに海底の光るを見るや否や轟然たる響と共に十丈余の激浪岩を砕きて陸上を襲ひ碇泊の帆前船を陸上に打ち上げたりしが某勢の凄まじきは言葉に尽し難かりしと聞く」[9－3]

「田老付近　岩手県被害報告　暮夜に至り数回の地震あり又午後八時頃東閉伊郡沖合に於て轟然一発巨砲を放ちたる如き轟音あり――其轟音の歇むや未だ数分間ならざるに海嘯俄に至り」[30]

岩手県宮古市宮古湾

「宮古町――七時半頃異様の地震あり次いて八時十分頃またもや長き不思議なる強震あるや否や異常なる波音と共に大海嘯押し寄せ来り」[10－1]

「宮古――而して海嘯の起り始は（海水の減退し始し時刻）夜間にして精測し能はざれども凡そ七時五十分頃にして同八時頃に増水し暫時にして稍や減退せしが八時七分に至りて最大の海嘯来り凡そ一丈四五尺の高さなる激浪轟々遠雷の如き響きをなして襲撃し忽諸の間に家屋人畜を一掃し去れり」[10－5]

「宮古測候所――同八時七分ニ至リ最大劇烈ナルモノ真ニ轟雷ノ如キ響ヲナシテ襲来シ」[35]

岩手県宮古市トドケ崎付近

「○重茂村長助かる　重茂村長西館富弥氏は八人力ある大の男なり当夜は早く寝床に入りしが其妻異なりたる響ありとて西館氏を呼起し先つ雇人をして戸外の様子を伺はせしに同人は一見するや否や逃出せり更に子供をして伺はせしに是亦雇人と同様なりしかば氏は訝りながら起出づる此時遅く彼時早く高さ廿四五間もあらんかと思ふ激浪居宅を指して襲ひ来たり」[11]

岩手県中部

「西南閉伊郡役所――本月十五日午后八時三十分前後地震アリ為メニ海水激騰大海嘯ヲ起シ其高サ五丈余沿岸ヲ襲来スルノ音響恰モ雷鳴ノ如シ」[35]

「南閉伊郡沿海町村――午後第八時二十分頃ニ至リ俄然異様ノ音響アルヤ否湾内怒濤ヲ起シ海水一時ニ暴漲し其高サ約四十尺以上ニ達ス」[34]

岩手県下閉伊郡山田町山田

「平日の音と違ひてゴーゴーと一斉に継続して鳴るゆえ必ずや海嘯なるべしと思ひ慌てて人々を喚び起し早く逃去らしめんとするうち音は万雷の一時に落るが如く恰かも山の崩るゝ勢にて十丈余の激浪矢を射る如く進み来たりしかば――

柄第二回の大海嘯は木を揉砕くかの響してバリバリゴーゴー天を捲て来り飯岡の九分通りと山田の半ばを奪ひ去りぬ」[12]

岩手県大槌湾

「大槌より十余町離れ最も海岸に近き安渡に於て――海上俄にガアーガアーと大瀑布の下るに髣髴たる音響なり――天地も崩るゝ許りに怒濤侵襲したれば居合わせる一同は津浪々々と号呼する間に押流され」[15－2]

「大槌町――老婆涙ふき敢へず彼の時海嘯来る音は雷様のやうに聞えた」[15－3]

「◎大槌町大砂賀　凶変当夜同多蔵も本家に行き居りし矢先き海鳴と均しく四隣海嘯海嘯と騒き立つる――大海嘯ですから早くお逃けなさいと絶叫せしは既に目前に逼りたる時にして此一刹那大狂瀾は見る見る家を蹴倒し家族は忽ち押流されつ」[15－5]

「山手の方にて「海が鳴出して来たから早く山へ登れ登れ」と呼声ありければ」[15－7]

「◎大槌町役場雇横浜忠蔵氏は当夜（砂賀町）家に在りしが海嘯の音聞くと均しく先つ老幼を四日町（無難の地）に避難せしめ己れも今や戸口を出てんとする時忽ち潮水は戸を蹴て浸入しければ氏は壁を突破り隣家の屋根に這出でし――」[15－8]

「八時二十分頃爆然たる一声轟き天柱摧け地維拆くるかと思ふ瞬間に大海嘯は天を捲て来り両石，水海，箱崎の南部及片岸に於ける民家は一挙にして微塵に破砕せられ人命及家財の損害其幾何なるを知らずと云ふ」[15－

11]

岩手県両石湾

「両石村　白木澤孝といふ医師あり就て被害当日の景況を問へば曰く当夜患者の家に出診し帰りて席に就くや否や百の砲門を開きしかの如き響きして海の湧くを聞きしかば扨てこそ海嘯と呼びも敢ず細君の手を取る此時遅く彼時早く数十丈の洪濤天を蔽ふて臻り――」[16－1，2]

「両石　彼の大砲の如き響と共に大海嘯は俄然として迫り」[16－2]

岩手県釜石湾

「釜石　帆船小安丸乗組房州人渡辺某――は十五日の夜上陸して宇澤村に在りしに沖合に天地も崩るゝ如き響せしを以て立出で見たるに（八時頃）五六町の間潮水一時に退き砂を現はしたれば奇変あらんを察し大音に海嘯々々逃げろ逃げろと云ひしに聞きたる者は忽ち高台に上りたる間もなく僅か一分間計にて沖合に真黒に山の如く高き浪逆立ちドードーと音して進み来り一面に押寄せたりと」[17－1]

「釜石　午後八時頃と覚ほしき頃大砲の爆発したる如き音を聞きたるが――濃霧朦朧と立籠めたる海面の一層暗黒となりて見るも恐ろしき浪柱の現はるゝを認めしかばスワ海嘯よとて遁出でんとせしに此時早く彼時遅く山なす大波ドットばかりに押寄せ来たり――
後の崖に攀登りたりき技手か崖に登るや否や浪の音は蛟竜の吼ゆる如く人家の壊る音物凄く助を呼ぶ悲鳴の声は恐ろしき響の間に雑りて天地も茲に覆りたるかと疑はれ気も魂も身に添はず暫時茫然として居たりしに凡そ三十分ばかりを経て浪の退きたれば」[17－2]

岩手県唐丹湾

「唐丹村――午後八時十分頃（釜石より二三十分早かりしが如し）轟然たる音響の聞こゆるや否や分秒の猶予もなく幾丈の濁浪滔々として一瀉千里の勢ひを以て襲ひ来り」[18－1]

岩手県三陸町吉浜湾

「吉浜にては激浪百尺以上に達し抱囲の巨木半バより折れて海に向て倒れ丈余四方の巨巌崖下に落ちて路上に横はり――吉浜村より越喜来に至らんとする途中に三軒家を為せる家屋あり――其主人は――轟然たる響と共に海嘯の押寄せ来りたるに心附きて逸早く家人に逃げ出せと云ひつゝ自分独り真先に裏口より飛出したるも家族は一人も未だ出で去る能はざる」[19]

岩手県南部

「気仙郡役所――九時ニ垂ントシ南東方ニ発砲ノ如キ音引続キ変動アリ（当時市街中ニハ心安カラサリシモノ多シ）沿海漁村ニ於テハ皆軍艦ノ発砲トノミ思ヒシニ暫時ニシテ猛烈ナル海水襲来」[35]

岩手県陸前高田市小友町

「峠を越え見れば――コハ抑も如何に轟然一発巨砲の声搗て加へて一面の大海原煌々たる白色光を顕出し雪山の一時に頽れ落ちたらん如き有様となるにぞ茲に始めて大海嘯の襲来なるを知り――
尚彼の目撃談とて後日人に語るを聞くに第一回の濤勢は慥に六丈余に達し第二回は第一回に比し凡そ一丈位は低く又第三回は第一回と甲乙なかりしとぞ」[21]

宮城県唐桑半島西側

「本吉郡唐桑村字小鯖――汽船ノ疾走スルカ如キ音響ヲ聞クヤ早已ニ床上三尺余潮水浸入シ来リ忽チ谷奥ニ向テ凡ソ二百間計リ押寄セラレ」[23－3]

「本吉郡唐桑村字小鯖――雷霆ノ如キ激響アリシヲ以テ何事ナラムト中仕切ノ戸ヲ開クヤ臺所ノ土臺際ヨリ潮水噴キ出ルヲ見テ此ハ海嘯ナラムト直ニ座敷ニ帰ル間モナク潮水充満」[23－4]

「本吉郡唐桑村字鮪立――同七時五十分頃大砲ノ如キ音響アリシ故不審ニ思ヒ――臺所ノ戸ヲ開キテ始メテ異変アルヲ知リ海嘯来レリト呼フ――直ニ座敷ノ障子ヲ一尺計リ開キ見ルニ三間計リ先キニ五尺余高キ白浪来ル」[23－5]

宮城県志津川町

「本吉郡志津川町細浦――俄然怒濤咆哮の響起ると与に身は何時しか床より押し上げられ屋根裏にまで圧迫せられて身動きも為し得ず」[26－1]

「志津川町清水　――海嘯の日は，――凄まじき音して，アナヤといふ間に家は潰れ，――水中に没せり」[26－2]

「志津川　午後八時とも覚しき頃轟然として雷鳴の如き響きありこは何事ぞと訝る間もなく海嘯々々と泣き叫ぶ声此處彼處に聞え」[26－6]

宮城県雄勝湾

「雄勝集治監出役所　八時十分とも覚しき頃殷々の声遥に起りて風声雨声交々到るが如き物音を聞く刻は夕立かと思ふ間さへあらせず百瀑の一時に圧下せるが如き勢もて海嘯は監の外構ひを衝倒し見る見る合宿所倉庫，炊所，事務所を薙ぎ倒し本監を呑み了れり」[28－1]

「雄勝出役所海嘯被害――轟然凄まじぎ鳴動を発するや当夜休憩する所の看守十六名只事にあらずと各糾合戸外に出で上官の指揮命令に従事する途端激浪怒濤の間に捲き込まるゝ所となり----

一　監房に於ては宿直看守前と同様の鳴動を聞くと同時に一人が大海嘯来れりと報ずるや激浪襲侵板塀を押し倒し立ろに監房の中に六尺以上氾濫した」[28－2]

宮城県名取郡

「名取郡――ノ沿海六郷，東多賀両村ニ於テハ六月十五日午後八時三十分頃俄然波濤ヲ起シ襲来ノ響恰モ遠雷ノ如クナリシ而テ海嘯ノ浸入スルコト三回」[29]

宮城県亘理郡

「亘理郡　最後ニ轟然一大鳴動ヲ発スルト同時ニ海嘯ノ襲来アリ」[29]

4.5.3　発生場所を特定できない例

岩手県唐丹湾

「唐丹村　○落雷と間違へて戸を鎖す　本郷の雲南治三郎は海嘯の起らんとするとき大なる音響を聞きて落雷なりと思ひ誤り周章狼狽戸を鎖して家内に蟄伏せしに家屋は怒浪に拍たれて粉砕し一家無惨の最後を遂げたりと」[18－3]

宮城県唐桑半島

「唐桑村――初め海嘯の起るや砲声の如き音二回ありしかば人々何事ならんかと思ひ居れる中八時半にいたり高さ平水より六丈に上れる海嘯疾風の勢を以て浸入し来り」[23－1]

「海嘯中に突進す　唐桑村字只越――海嘯の当日大船の駛る如き響あると共に轟然たる大砲の如き音の聞こえしよりスワ敵艦来れりと急ぎ用意の軍服を着け劔を提げて海岸に突進するや山なす怒濤に捲き去られて行衛知れず」[23－2]

「本吉郡唐桑村字鮪立――六月十五日――午後七時四十分大砲ノ如キ音響アリシヲ以テ不審ニ思ヒ如何ナル変事ヤ起ルヤラムト二回ノ音響毎ニ時計ヲ見居リシニ――俄然頭上ヨリ水溢レ掛リシカハ互ニ何事ナラムト言フ間モナク潮水ハ已ニ室内ニ充満セリ――」[23－6]

宮城県気仙沼市大島

「本吉郡大島村字横沼――激浪ノ音響ヲ聞キ最初ハ雷鳴ナラント思ヒ居リタルニ忽チニシテ激浪ノ浸入スルト同時ニ家屋破壊」[24－1]

宮城県歌津

「歌津村に於ては轟然たる響音を聞きて軍艦の砲声にはあらずやと思ふ間もなく五丈余の濁浪渦巻き来たり」[26－5]

宮城県仙台湾

「宮城郡七ケ浜村ハ六月十五日午後九時頃寅卯（東北東）ノ方面ニテ雷鳴ノ如キ音響アリ居民何レモ何事ナラント怪ミ居ル内高浪俄ニ襲来――襲来ハ僅ニ一回ナリキ」[29]

4.6　原因不明

北海道十勝郡

「北海道庁の報告に十勝国茂寄地方は十五日午後八時海上沖合に遠雷の轟くが如き響を聞き同時に微震あり地響殆と十五分間に亘る」[31]

青森県八戸市

「湊村　村役場員の語る所によれば海嘯当日午後七時五十分頃南方に当りて二回の砲声を聞きしが間もなく八時三十分頃に至りて大海嘯前後四回迄襲ひ来り」[3]

岩手県九戸郡野田村

「野田村大字城内に佐藤何某といへる人海嘯の当日海面にて轟然たる響を聞きスワこそ日露の開戦よと二十余人の妻子眷属を引つれて海蔵院といへる小高き寺院に駆つけて危ふき難を逃れし」[6－2]

岩手県下閉伊郡普代村

「普代太田名部　台湾帰りの者あり入浴中大砲の音を聞き「必定軍艦の空砲演習ならん一見せばや」と着物を着て山に上り四方を見回せしも何のこともなしと思ふ間に逆捲く浪の起る」[7]

岩手県下閉伊郡田老町

「田老村は宮古北四里の海浜に在る一大漁村なり十五日午後七時三十分頃二度の地震あり強からされども震動の時間長し既にして東北の海中に当り空砲の如き響きを聞くこと三回，村民等始て異常の事あるを知りし瞬間時は正に八時廿分の頃山の如き激浪轟々として襲ひ来り全村の残らすを浚って之を背後の高地へ持上げ更に三回の大激浪来りて船舶家屋を粉砕し悉く蒼海の中に持去れり其勢の激甚なる」[9－1]

岩手県下閉伊郡山田町船越

「船越村は船越湾と山田湾とに周囲を包まれ居れる村落――同村は今を距る四十一年前に大海嘯あり其害の及ぶ所今回の如く甚だしからざりしと雖も数戸の破壊家屋を生じ浸水の害を受けたる事あるを以て経験ある父老は午後六時過雷鳴の如き響きあるや否や海嘯の前兆ならんかと早くも逃支度を為し壮幼亦之に従て小山に登りたるも多かりし」[13]

岩手県上閉伊郡大槌町

「大槌町は大槌湾の奥に位し御箱，野島の両岬湾口を約す　夜の八時頃――沖合に当たりて百雷の一時に落るが如きを聞き人々奇異の想ひを為すうち大地微震を感ずると同時に第二回の海上鳴動を聞きぬ此度は第一回に比して響の高き事数層倍若しや海嘯には非ずやと疑ふ間に果然大海嘯は大山の崩れ来るが如く極めて速やかなる勢を以て襲ひ来たれり」[15－1]

岩手県三陸町

「[20－1] 午前十時に激響を聞く　海嘯当日綾里村の西北四里半計りの處にある五葉山（気仙郡第一の高山）に檜の木を伐採しつつありし樵夫――午前十時頃に於て太平洋上に雷の如く砲の如き激響の起るを聞き，又午後七時に於て激震に接触せり」[20－1]

「十五日午前十時頃なりき綾里村を距る約十里の地にある五葉山に於て官林払下の檜樹を切り居たる木挽は綾里村方向に当り砲声の如き響を発せるを聞き午後七時頃再び山岳の鳴動ありし」[20－2]

宮城県唐桑半島西側

「本吉郡唐桑村字小鯖――午後八時頃大砲ノ如キ音響ヲ聞クト同時ニ続テ二回計リ地震アリ」[23－4]

岩手県

「彙報

管内各郡役所ヨリノ地震報告中未達ノ箇所アレトモ孰レモ当時各所ニ数回ノ微震アリテ過半南西，北西若クハ東，西ノ水平動ナリシ而シテ胆澤郡水澤町ニ於テハ大砲ノ如キ音響三回アリシト又二戸郡福岡町ニ於テ震動後十分ヲ経テ戸外通車ノ軌ルカ如キ声響ヲ聞キシガ夫ヨリ六分ヲ過キテ俄然頭上迅雷ノ轟クヲ遠キニ聞クカ如キ響アリ前後共其方位ハ東方ニアリシカ如シト報セリ」[35]

胆澤郡水澤町に最も近い海岸は，その南東約50kmの広田湾や気仙沼湾である。また二戸郡福岡町は現二戸町でやはり久慈の西方約50kmの地点である。

宮城県仙台湾

「宮城郡　浦戸，松島，塩釜三町村ノ海岸ハ同日午後八時頃強震アリ又東方ニ当リテ大砲ノ如キ音響ヲ聞ケリ就中松島村ニ於テハ潮流急激ニシテ海上異状アルヲ認ム」[29]

「亘理郡　六月十五日午後九時十五分頃本郡東北即チ太平洋沖合ニテ数回遠雷ノ如キ鳴響アリ最後ニ轟然一大鳴動ヲ発スルト同時ニ海嘯ノ襲来アリ」[29]

最初の数回の音響は方角から考えて牡鹿半島辺りの沿岸で生じた音響であるかも知れない

「亘理郡　坂元村沿海ニモ海嘯アリ当初数十回ノ地震アリ次テ海中ニ百雷ノ一時ニ落チタルカ如キ激響アリタレハ居民驚愕シテ地震ノ前兆ナラン抔噂シ居ル間モ無ク海水急ニ押寄セ来リ」[29]

4.7　他種類の音響

岩手県船越湾

「◎大槌町四日町にて駄賃附を業とする庄之助といふは海嘯当夜馬に荷物を附け波板の海岸を通行の際図らすも路傍の電信線ビーンと計り音せしにぞ馬は驚きて彼方の小山に駈出したり庄之助は遣らじと手綱に取付き引戻さんとせしかど力及ばす手綱に取付きたるまま馬に引かれて山手の方十間程も行きしと思ふ間に海嘯は今来し海岸の路上に八九尺の高さを以て襲来りアア危機一髪馬の逸する今少し遅かりしならば庄之助の命は馬諸共無かりしなり因記す電信線の響きしは海嘯の為め釜石の電線切断せし際の反響ならすやといふ者あり」[15－9]

4.8　音響無しあるいは不明

岩手県釜石湾南湾側

「釜石　白浜区――別に音もなく兆もなく俄然捲取られ」[17－4]

岩手県唐丹湾奥

「釜石市小白浜――鈴木トミは当年十九歳にて負傷者の一人なるが当時の情況を語るを聞くに轟然たる響をきいたかどうかも能くは覚え居らぬ位にて何事かと思ひ庭先に駈け出す内に早漫々たる波の上に在り――」[18－4]

岩手県三陸町綾里港

「綾里村字湊に住みし医師木下良斉は遭難者の一人なり当時の実情を語て曰く午後八時半頃なりき大津浪よと云ふ声を聞きしが席を起つに遑あらずして塩水は早や家屋を充満した」[20－2]

5.　いくつかの湾・地点に於ける特徴

5.1　船越湾南端の吉里吉里

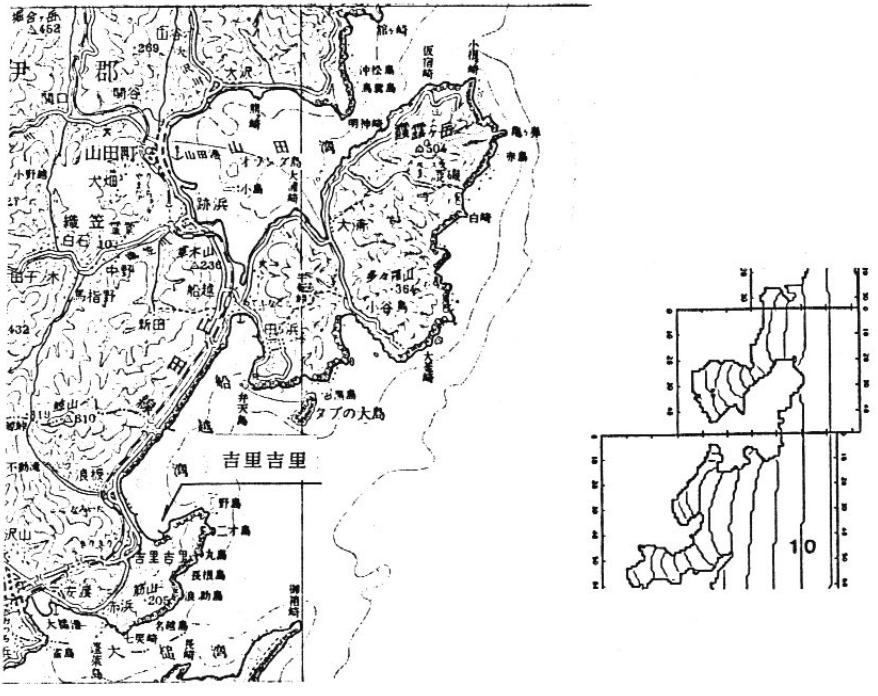
対象地点に襲来する時点のだいぶ前から，津波に起因する音響を聞いていた事が明確に判る典型例である。

図－5－1に船越湾近辺おける津波フロントの一分毎の位置を示す。ここでは，津波はほぼ真東より襲来した。地震後10分で船越湾北側で北東に長く突き出た半島の先端である亀ヶ崎に到達し，11分後に大釜崎，13分後に北では大島，南では大槌湾南部の御箱崎，15分後に吉里吉里の東に突き出た野島に到達，という順序で進行し，更に2分かかって吉里吉里に来襲した。これら半島の海岸は所々に小さなポケットビーチが存在するものの，全体としては岩石海岸であり，大波高の津波の衝突により，音響の発生することが予想される地域である。

従って，下記の当時の体験談はこの状況をきわめて良く反映しているものと考えられる。

「上閉伊郡大槌町吉里吉里

◎　小学校長海野某の談に十五日夕刻将さに点燈の頃一回の地震ありこの時偶ま来客ありて椽側に於て談話を為し居りしに地震より凡そ五分間を過きたと思ふ頃何處となく轟々と鳴り響く音あり初めは石臼の音と思ひたれと追々此音響は近接するが如き故少しく不審を起ししばしば椽側より頸を延へて戸外を望みたれとも海上は瓦斯の為めに遠く見る能はず



図－５－１　船越湾吉里吉里地点位置図
右の図は計算による津波先端の毎分毎の位置，数字は津波発生後の時間。

別に戸外に異状を認めず唯細雨の霏々として窗を撲つあるのみ而して轟々の音止まずして益々接近するものの如し遂に戸外を望むこと三回目のとき海上激浪を湧かして白色銀彩あるを見思はず海嘯なりと絶叫せしは已に目前に逼りたる時にして此一刹那海岸にありし家屋は一斉に倒潰して百雷の轟くが如し尋常小学校は海岸なれども少く高地なれば幸に潮水浸入せさりし故直ちに勅語を身に纏ひ夫より数個の提燈を点し庭前に篝火を燃し此等種々の動作を為したる後第二回目の激浪押寄せたれば此間全く十分以上の猶予ありしを疑はず而して最も先に轟々の音響ありしは疑もなく激浪の湾外の岩石に撞突せし音なり云々」［14］

5.2　岩手県釜石湾

湾奥では湾口近くの岸壁海岸で津波により発生した音響を聞いていたにもかかわらず，ある場所のみ殆ど音を聞いていないという特異な例である。

釜石湾はその北の両石湾と双子湾の形となり，カモメ森山のある岬で大槌湾と境され，鷹巣山のある岬で唐丹湾と境されている。これら湾口の岬先端には，地震後14分に先端部到達，それより約６分で釜石湾奥に到達している。

釜石港のある湾奥では，津波襲来以前から「大砲の音」，「汽車の音」を沖合に聞き，また市内では津波来襲直前にも音響を聞いている［17－２］。

それより南の平田区でも，地震の後継続する音響を聞いているようである［17－５］。

これらは，岩壁海岸に津波が衝突した音であろうと推察される。

しかし，平田の東にある白浜では，殆ど音に気づかず津波の襲来で被害を受けている［17－４］。この地点は図－５－２にみるように，津波進行方向に直に近い形にやや深く湾入し，両側に高い岬が存在している為，他地点の音が遮蔽されやすくなっていたのであろうか。また，同じ理由により，進行主方向から逸れてここに侵入した津波の波高は小さく，岸で大音響を作るような崩れ方をしなかったのとも考えられる。何れにしても，この白浜地点は，他地点の津波の音も，その地点での津波の音も聞いて居らず，特異な地点である。

5.3　宮城県本吉郡大谷

他地点で発声した音を継続して聞いていた事が明らかに判る地点で，５－１と同様な例である。また，この地点では，明らかに津波によらない音も聞いている。

図－５－３に地点と津波先端部の時間毎の位置を示す。大谷地点は気仙沼湾外の南側にあり，気仙沼線が海側に凸出した部分の影にあたるような場所である。地震後23分頃遥か東北の唐桑半島先端に津波が到来，２５分には気仙沼湾大島の南端，28分に気仙沼湾口南側の岩井崎付近，29分頃大谷地点到達となっている。この間，大谷地点では継続して音響を聞いた模様であり，次のように記述されている。

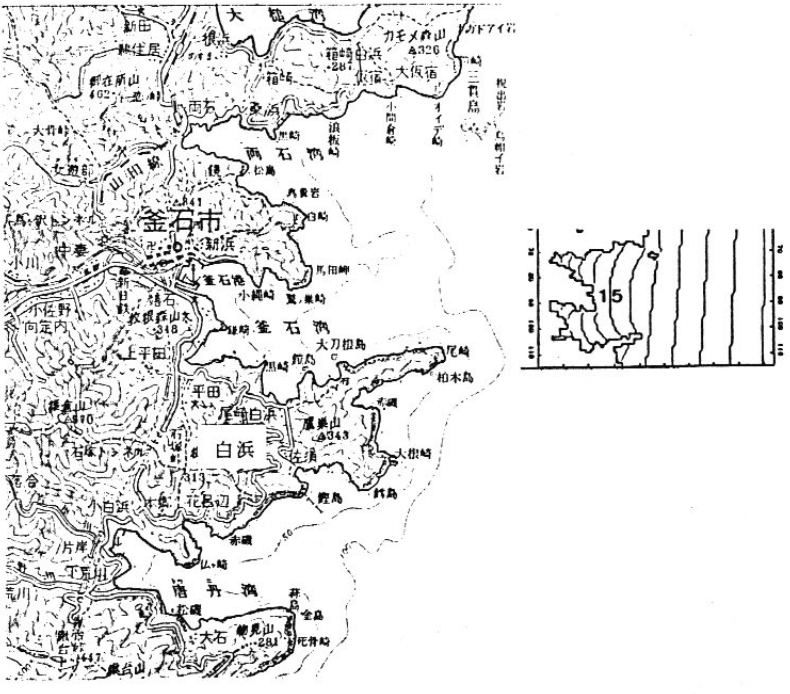
「午後八時頃頻リニ鳴動アリ最初ハ近所ノ挽臼ノ響ナラン抔話シ居リシカ漸次音響強マリシ故或ハ浪ナラント思ヒ自分ハ坐敷ノ障子ヲ明ケ海上ヲ瞻ルニ変状ナカリシヨリ再ヒ爐邊ニ来ル間モナク潮水浸入シ」［25－２］

「午後八時頃轟々響渡ル音ヲ聞キ単ニ雷鳴ナラムト思ヒ居タルニ稍暫ク経ルモ其音響ノ止マサレハ不審ニ思ヒツヽ戸外ニ出テヽ往来ヲ見ルニ海濱ノ方ヨリ膝丈位ニ水ノ押シ流シ来ル」［25－３］

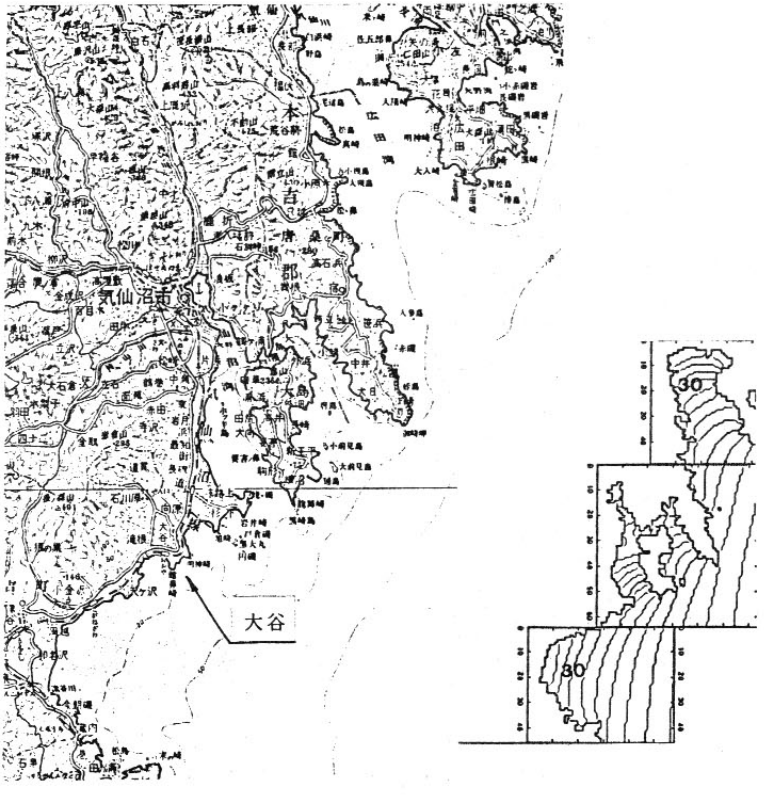
「午後七時過キ雷鳴ノ如キ響アリテ漸次地響烈シクナリシ」［25－４］

ただし，これと別種の音も記録されている。すなわち，

「海嘯襲来当日迄東北ノ方位ニ於テ数回大砲ノ如キ音響ヲ聞キシカ当日音響アリテ凡ソ三十分程経タリト思フトキ海嘯襲来セリ」［25－５］という記述であるが，図－５－３に示



図－５－２　釜石湾白浜地点位置図
右の図は計算による津波先端の毎分毎の位置，数字は津波発生後の時間。



図－５－３　宮城県本吉郡大谷地点位置図
右の図は計算による津波先端の毎分毎の位置，数字は津波発生後の時間。

すように津波襲来は地震後30分であり，この音響は地震に伴うものであろう。あるいは当日の気象から考えると，雷鳴であった可能性もある。

6. 終わりに

明治三陸大津波発生時・襲来時における音響に関する当時の記録を収集し，分類を試みた。

地震に伴う音響を聞いた地点と聞かなかった地点の区別は，今回は出来なかった。いずれ海中空中を通じての音の伝播計算を行なって，それとの比較を行いながら検討することを予定している。

津波が原因の音響については，現在利用できる数値計算結果との比較を若干実施した。場所，津波の伝播方向，などの条件により対象地点へ到達する以前から不思議な音響と判断される音が生ずることが説明できたものと考える。音が聞こえ始めてから津波到達まで5分以上ある場所では，この音を津波襲来直前の判断材料として使用することが可能であろう。そのような例を3例ほど挙げておいた。ただし，これにも見逃すことの出来ない盲点のあることも示した。

海岸に津波が襲来して生ずる音の大きさと津波の大きさの間には関連があるものと思われるが，今回の解析には間に合わなかった。津波シミュレーションの結果を使いながら今後の検討の課題としたい。

付録　明治三陸大津波における音響の記述抜粋

次に示す7冊の文献より抜粋した。抜粋文の配列は北から南へとしてある。なお，各文末に資料名を示すが，その略号は次の通りである。

［上巻］――風俗画報臨時増刊　海嘯被害録上巻，東陽堂，明治廿九年七月十日

［中巻］――風俗画報臨時増刊　海嘯被害録中巻，東陽堂，明治廿九年七月廿五日

［下巻］――風俗画報臨時増刊　海嘯被害録下巻，東陽堂，明治廿九年八月十日

［閉伊］――岩手県陸中国南閉伊郡海嘯紀事，巖手県西南閉伊郡役所編纂，明治三十年三月

［宮城］――宮城県，宮城県海嘯誌，明治36年6月

［伊木］――伊木常誠，三陸地方津浪實況取調報告，震災予防調査會報告第十一号，pp. 5－34

［震災］――震災予防調査會，震災予防調査會報告，第十一号，明治29年

北海道

［1］北海道ノ津浪　日高国幌泉地方ニ於ケル六月十五日津浪ノ襲来退却ハ各所一定ナラサルモ，概ネ同日午後八時三十分乃至九時三十分ニ始マリ同十一時三十分乃至翌日午前一時前後ニ終レリ，又天候ハ終日別ニ異常ヲ呈セズ，而襲来ノ方向ハ南方ヨリ襟裳崎ヲ衝キ夫レヨリ左右ニ分レ一ハ幌泉村ニ至ル沿岸ヲ掠メ一ハ猿留村ニ至ル沿岸ヲ襲ヘリ，其初ニ當リ海水湧々タル中凄然一種ノ音響ヲ発シ退去スル事十数分間ニシテ数十間若クハ数百間陸地ヲ浸襲シ，其餘勢ノ盡キルヤ更ニ劇甚ナル猛力ヲ以テ遠ク海中ニ退却シ大浪ノ進退スル事凡ソ三回其内被害ノ者モ多カリシハ第二回目トス，潮水ノ深サ幌泉村ハ一丈内外歌別村小越村間ハ八尺乃至一丈五尺庶野村猿留村間ハ一丈二尺乃至三尺ニ及ベリ（道廳報告）（伊木，p. 11）.

［2］六月十五日午後八時十勝国茂寄村海面沖合ニ於テ遠雷ノ響クガ如キ音響ト共ニ微震アリ，其振動ニ比シ地響長ク且ツ大ニシテ殆ント五分間ニワタリ，（伊木，p. 11）.

青森県

［3］八戸市湊

湊村は八戸の東にありて，湊小中野，白銀の三字より成る而して小中野には湊停車場前の小川に小船の打上げられし外損害なく白銀に三戸の潰家二名の負傷者あり湊に三戸の潰家四名の死者あり全村に於る漁船の流亡破壊百三十八艘外にアグリ網一，地引網一を失ふ，村役場員の語る所によれば海嘯当日午後七時五十分頃南方に当りて二回の砲声を聞きしが間もなく八時三十分頃に至りて大海嘯前後四回迄襲ひ来り村吏熊石某の如きは纔に身を以て免れたりといふ（中巻，p. 34）.

［4］三戸郡階上村

階上村は大蛇，乙起，柳，小舟渡の四字より成る三戸郡極南の漁村にして二十一名の惨死者あり，当日小舟渡の漁夫沖合にて漁業し居たるもの一時船の水上に膠せしに驚き怪しと思ふ間に陸地に当り砲声の如きものを聞きたれば直ちに引返し来たりし處夥しく材木の流れ来るに逢ひ始て其海嘯なりし事を知しといふ（中巻，p. 13）.

岩手県

［5］久慈市

［5－1］門前　○東警察署長の談話　大川目警察署長東直佐氏の談話に拠れば十五日午

後七時頃より軽震一時間許に亘り身体を上下に動揺せらるゝ心地し八時廿分に至り時ならぬ鳴動起り恰も万雷の一時に轟が如く覚ゆるや忽ち叫喚の声，耳底に徹したるを以て急ぎ巡査部長に命じ道を分て湊に趣かしめたるに此時潮水は既に道路田園に浸入し泥濘脚を没するを以て巡査等は辛くも山麓に沿ふて門前に達したりと（中巻，p. 33）.

［5－2］久慈港　久慈港は十五日の午後九時十五分強震あり夫より十三分に二回の響を聞き次で同三十分海上遥に凄まじき響せしと思ふ間もなく高さ五丈計りの海嘯起りて瞬間に八日町（港より一里）迄押上げたりしも僅々五分間にして濁水全く退きたり（上巻，p. 34）.

［5－3］久慈湊　○不思議の助命　岩手県土木技手酒井鉄二郎氏は久慈町に出張中去る十五日午後八時十分頃戸外にピストル発射の如き声を聞き同十五分頃海岸に鳴動を始めし海面を見ている中数十丈の怒濤襲ひ来りて氏は忽ち其中に捲き込まれ――（中巻，p. 33）.

［5－4］湊村　○遭難者酒井技手の実況　巌手県の土木技手酒井鉄二郎氏は六月十五日大海嘯に捲き込まれ万死の中に一生を得たるが氏が六月二十日付を以て同県知事に具申したる詳報に云く六月十五日は朝来陰雲暗憺として時々降雨あり梅雨の候とはいへ如何にも鬱陶敷非常に人意をして不快を感ぜしめたるも市中家々旧暦五月五日に相当するを以て端午の祝酒を催さんと別に意に介する所もあらざりしが晩暮七時五十分に水平の微動あるを始ととし八時頃に至りて再び動揺あり晩食に就く凡そ五分にして震動の大なるを感じたれども其度合は釣ランプの動揺は左程にはあらざりしなるも之に反して身体の震動は益大なるを感じ漸く其食を終んとする頃（凡八時十分頃）忽然戸外庭前に於て「ピストル」を発射したる如き音響を耳にし益奇異の思を起したるが八時十五分頃となるや東方海岸に当りて俄然鳴動を始め汽船据付の機関振動の如き感あり大ならず小ならず上下一定の微動にして振動愈々益々強きを加へたり依て蹶起して東方の海面を見るに牛島と称する島嶼の方面に当りて大空朦朧として薄赤面を呈し鳴動の方位も同一にして右方々面には此の暴状なし是れぞ天変地異の徴ならんと立退の用意に掛るや否や寄州中建設しある数十の納屋小屋轟然破竹の勢を以て壊倒し来たりたれば海嘯なり海嘯なり速に戸外に出づべしと叫びて駆け出たるも如何せん四辺暗黒にして事物を識別する能はず躊躇する中に身は既に数十丈の怒濤に襲はれ両足を払はれて激浪に捲き込まれたるが――（下巻，pp. 27－28）.

［6］九戸郡野田村

［6－1］　○無数の怪火　野田駐在所の巡査遊佐左仲氏は海嘯の当夜所轄部内の宇野村を巡廻し午後八時二十分頃駐在所を距る十丁許の所まで帰りしに海上異常の鳴動を聞き怪みながら野田に近くや海潮は曽て見しことなき高處まで浸入せり真逆に海嘯と思はざれば暫し佇み考ふる内に大さ提灯程の怪火其数幾十となく野田の民家の在る所より背後の山に懸けて高低に幻光を発したれば愈々訝り怪みつつ是れこそ正しく世俗に伝ふる狐か狸の悪戯なるべしと其まま進み往きけるに不思議々々々四方に家屋の倒壊する音最と物凄く聞え叫喚救を求むるの声耳に徹したれば扨は海嘯にてもあらんかと正に野田に入りし頃は全体破滅の惨況に陥り氏の妻女と二人の愛児とは無残の最後を遂げたりとなん跡にて調査すれば怪火の見えたる處は被害の部分に止りて怪火なき高處の民家は何等の異状なかりしとぞ（下巻，p. 25）.

［6－2］　○天罰踵を旋らさず　野田村大字城内に佐藤何某といへる人海嘯の当日海面にて轟然たる響を聞きスワこそ日露の開戦よと二十余人の妻子眷属を引つれて海蔵院といへる小高き寺院に駆つけて危ふき難を逃れしが此佐藤氏は村内屈指の豪家にて日頃盗賊の覗ひ居たりけん同氏家族が今しも周章して海蔵院に引き退きたるを早くも見て取り一人の曲者斧を携へて押し込みつ簞笥の錠前を打ち

破り衣服其他の目ぼしき物品を攫み去らんとする其一刹那狂瀾怒濤の驀地に押し寄せ来りて差しも堅固なる同家もグワラグワラと粉微塵に潰れしかば何かは以てたまるべき此の悪漢も吾れと我が携へたる斧を以て見るも無残なる迄に自分の頭上を立ち割り鮮血に塗れて簞笥の前に倒れ死し居たりと（下巻，p. 26）.

［7］下閉伊郡普代町

○遺骸を惜む兵士の心　普代村の大田辺に坂下其及高浜栄太郎とて共に二師団兵にして台湾帰りの者あり入浴中大砲の音を聞き「必定軍艦の空砲演習ならん一見せばや」と着物を着て山に上り四方を見回せしも何のこともなしと思ふ間に逆捲く浪の起るを見て「死んでも死骸は無くすまいと」両人手早く帯を解き木に身体を括りて待ちしに山までは来らず為めに不測の変を免れたり普代は三十戸もありしが一戸の外流亡せり（下巻，p. 25）.

［8］下閉伊郡岩泉町

中野の変象　小本村の中なる中野にては沖の鳴るかと思ふ間もなく家屋破壊陥落し然る後海嘯の襲ひ来るを見しと云ふ（上巻，p. 32）.

［9］下閉伊郡田老町

［9－1］田老村は宮古北四里の海浜に在る一大漁村なり十五日午後七時三十分頃二度の地震あり強からされども震動の時間長し既にして東北の海中に当り空砲の如き響きを聞くこと三回，村民等始て異常の事あるを知りし瞬間時は正に八時廿分の頃山の如き激浪轟々として襲ひ来り全村の残らすを浚って之を背後の高地へ持上げ更に三回の大激浪来りて船舶家屋を粉砕し悉く蒼海の中に持去れり其勢の激甚なる実に被害地第一の惨状と為す而て翌朝迄総計七回の海嘯あり此間五回の地震を感じたりといふ（上巻，p. 31）.

［9－2］海に在て難を免る　此日同村の漁夫六十人は十五艘の鮪船に乗りて艮位二里計の沖合に漕出鮪網を曳てありしが陸地の方に当て不思議にも汽車の響きの如きを聞き訝り怪む事大方ならす子細があらんと力を合せ船を陸へと引返す途中三回の大激浪に遭遇せり（上巻，p. 32）.

［9－3］田老村　○海嘯を見る　小湊の人海岩の高處に在りて異様の波の音を聞くと同時に海潮退くこと三百間余明かに海底の光るを見るや否や轟然たる響と共に十丈余の激浪岩を砕きて陸上を襲ひ碇泊の帆前船を陸上に打ち上げたりしが某勢の凄まじきは言葉に尽し難かりしと聞く（中巻，p. 31）.

［9－4］田老村ノ惨状ハ釜石以北比肩ノ地ナク，――今回ノ如キ洪浪（田老ニテハ約四十八呎）東南ヨリ激襲シナバ惨至リ，儻極マル者敢テ怪ムニ足ラサルナリ，其方向ヲ里人ニ問ヘバ津浪少時前北方ニ當リテ轟々タル音響ヲ聞キシヲ以テ北方ヨリ来タリシナラント云ヘドモ，田老ノ東北ニ當リテハ真崎遠ク海中ニ突出スルカ故ニ浪ハ他所ニ於ケルガ如ク尚ホ東南ヨリ進来シ先ヅ此岬角ニ激シ轟々ノ音響ヲ起セシモノナラン，（伊木，pp.22~23）.

［10］宮古市

［10－1］宮古町――七時半頃異様の地震あり次いて八時十分頃またもや長き不思議なる強震あるや否や異常なる波音と共に大海嘯押し寄せ来り（上巻，p. 31）.

［10－2］宮古町　○宮古湾内の海嘯は午後八時三十分に起り前後十二回の激浪ありて此間一時間余に亘る最初の浪は高さ五丈余に上り第二回は之に次ぎ漸次に低かりしも――

○巡査の働き　宮古警察署長以下皆良く其職を尽せるは人民の感賞する所鍬ヶ崎に下宿したる非番二人物音に驚き正服を着けんとするにハヤ水は床に上る（下巻，p. 22）.

［10－3］鍬ヶ崎　○海嘯の前兆　大災の前兆に就ては確たる原因と認むべき異状なかりしも当日鍬ヶ崎の漁夫等が女遊沖に出で漁業に従事し居たるに沖合に幽に鳴動聞えたれば気味悪さに帰途に就きたるが同所よりは常に二時間半を費すにあらざれば帰着し能はさるに僅かに三十分間にて帰着せしは奇怪なりと云ひ居たるに果して海嘯来りたりと云ふ（中巻，p. 30）.

［10－4］鍬ヶ崎村　○出漁者の断腸　田老

村の内大字乙部に於て該夜四人乗十五隻にて流し網に出たる者あり二里以内丑寅の沖にて網を張り居りし處陸の方にて汽車の走るに似たる音せり浪は至極穏なれども兎に角網を引上げて帰る途中大浪に出逢ふこと三回同時に流木夥しく来たり始めて海嘯なることを知り港口に来たりたれど浪高くして入るべからず（下巻，p. 24）.

［10－5］宮古測候所の報告に云ふ　今回の海嘯につき宮古測候所の報告に曰く十五日夜の海嘯は安政年代以来未曾有の一大海嘯にして本県管内東海岸地方は勿論隣県沿岸地方何れも多少惨害を蒙れり今を去る四十年前安政三年七月廿三日（陰暦）正午頃のものは地震は甚だ強く且頻繁なりしも海嘯は今回程の惨状を呈せざりしと古老は云へり扨今回海嘯当時の模様を略記すれば前日来陰鬱の天候にして雨霧あり気圧及び温度共に例年より高度を占めしが午後六時三十二分三十秒稍や弱震し震動時間は五分の長きに亘り方向は東北東，西南西にして頗る緩慢なりし次いで同時五十三分三十秒微震し尚八時零二分三十五秒八時二十三分十五秒八時三十三分十秒八時五十九分零秒に微震し其後九時より十時の間に四回十時より十一時の間に一回十一時より夜半迄に二回の微震ありて計十三回震動せり而して海嘯の起り始は（海水の減退し始し時刻）夜間にして精測し能はざれども凡そ七時五十分頃にして同八時頃に増水し暫時にして稍や減退せしが八時七分に至りて最大の海嘯来り凡そ一丈四五尺の高さなる激浪轟々遠雷の如き響きをなして襲撃し忽諸の間に家屋人畜を一掃し去れり爾後著しきものは六回にして翌日正午迄は幾分の増減ありしものゝ如し又地震は翌十六日は十三回十七日は十二回十八日は六回にして孰れも微弱震なりし云々（上巻，pp. 3～4）.

［11］宮古市重茂

重茂村　○海に水なし　宮古の漁夫にて重茂の小字根瀧といふ所へ鮪網の出稼に赴き居るもの三十二三人あり監督者の高橋治之助は夕飯の際沖合の鳴ること頻りなりければ戸を明て之を窺ひしに不思議々々々海の極て深き處まで一滴の水だになかりしかば扨こそ海嘯に相違なしと慌しく之を一同に伝へて後の山に逃上りしも十三名は無惨や万仞の海底に葬られたり又治之助が戸を明けて見し時は夥しき漁船の隻影を認めざりしとなり――

○重茂村長助かる　重茂村長西館富弥氏は八人力ある大の男なり当夜は早く寝床に入りしが其妻異なりたる響ありとて西館氏を呼起し先つ雇人をして戸外の様子を伺はせしに同人は一見するや否や逃出せり更に子供をして伺はせしに是亦雇人と同様なりしかば氏は訝りながら起出づる此時遅く彼時早く高さ廿四五間もあらんかと思ふ激浪居宅を指して襲ひ来たり（下巻，p. 20）.

［12］下閉伊郡山田町山田

当日の模様　午後八時半（此地吏員の時間は時計の狂へるにや皆相違せり只聞くがままを記す）の頃大地水平動の軽震を感じて其時間極めて長く而も間断なく九時半頃迄震動したれば尋常の事に非ずと思惟して戸外に出でしに大釜崎（湾口に在り平日波の当る音釜の如く聞ゆ故に名く）の方に当て海の鳴るを聞く然れども平日の音と違ひてゴーゴーと一斉に継続して鳴るゆえ必ずや海嘯なるべしと思ひ慌てて人々を喚び起し早く逃去らしめんとするうち音は万雷の一時に落るが如く恰かも山の崩るゝ勢にて十丈余の激浪矢を射る如く進み来たりしかば俄に山に攀ぢ登りしも其時は已に第一回の海嘯飯岡の大半を嘗つくしたり此第一回の襲来に逢ふて親は子を失ひ妻は夫に分れ兄は弟に離れたれば人間の情として早くも之を救ひ出さんと直ちに山より降りし折柄第二回の大海嘯は木を揉砕くかの響してバリバリゴーゴー天を捲て来り飯岡の九分通りと山田の半ばを奪ひ去りぬ（上巻，pp. 30－31）.

［13］下閉伊郡山田町船越

船越村は船越湾と山田湾とに周囲を包まれ居れる村落なれば其被害最も大にして田老村と

相并びて東閉伊郡第一の被害地たり総戸数四百五十四戸の内流失せるもの三百六十七戸人口二千二百八十二人の内溺死せるもの九百三十六人にして重傷を負へる者七十名，軽傷者百九十二名全家死滅して家名の断絶せるもの六十一老幼のみ生残りて生活の途なきもの三十戸あり尚ほ此外に小学校，役場，巡査駐在所は流亡し寺院は潰頽せしが死亡者の割合に少き所以のものは同村は今を距る四十一年前に大海嘯あり其害の及ぶ所今回の如く甚だしからざりしと雖も数戸の破壊家屋を生じ浸水の害を受けたる事あるを以て経験ある父老は午後六時過雷鳴の如き響きあるや否や海嘯の前兆ならんかと早くも逃支度を為し壮幼亦之に従て小山に登りたるも多かりしに由なり（下巻，p. 19）.

［14］上閉伊郡大槌町吉里吉里

◎小学校長海野某の談に十五日夕刻将さに点燈の頃一回の地震ありこの時偶ま来客ありて椽側に於て談話を為し居りしに地震より凡そ五分間を過きたと思ふ頃何處となく轟々と鳴り響く音あり初めは石臼の音と思ひたれと追々此音響は近接するが如き故少しく不審を起ししばしば椽側より頸を延へて戸外を望みたれとも海上は瓦斯の為めに遠く見る能はず別に戸外に異状を認めず唯細雨の霏々として窗を撲つあるのみ而して轟々の音止まずして益々接近するものの如し遂に戸外を望むこと三回目のとき海上激浪を湧かして白色銀彩あるを見思はず海嘯なりと絶叫せしは已に目前に逼りたる時にして此一刹那海岸にありし家屋は一斉に倒潰して百雷の轟くが如し尋常小学校は海岸なれども少く高地なれば幸に潮水浸入せさりし故直ちに勅語を身に纏ひ夫より数個の提燈を点し庭前に篝火を燃し此等種々の動作を為したる後第二回目の激浪押寄せたれば此間全く十分以上の猶予ありしを疑はず而して最も先に轟々の音響ありしは疑もなく激浪の湾外の岩石に撞突せし音なり云々（閉伊，pp. 186－187）.

［15］上閉伊郡大槌町

［15－1］大槌町は大槌湾の奥に位し御箱，野島の両岬湾口を約す大海嘯の当日は同町出身凱旋兵の為に祝賀会を南端海岸の州崎に開く余興として多くの花火を製造し昼は海中に船を浮べて狼煙を天に張らし夜は会場付近に於て之を打上げたり去れば全町の有志家は朝来の雨を厭はず子女を伴ふて会場に参集し名誉ある兵士を款待し一同興に入りて夜の八時頃となれり而して花火は第四発目を打上げ終りぬ折柄沖合に当たりて百雷の一時に落るが如きを聞き人々奇異の想ひを為すうち大地微震を感ずると同時に第二回の海上鳴動を聞きぬ此度は第一回に比して響の高き事数層倍若しや海嘯には非ずやと疑ふ間に果然大海嘯は大山の崩れ来るが如く極めて速やかなる勢を以て襲ひ来たれり（上巻，pp. 28－29）.

［15－2］大槌村　○鳴動と進潮　沖合に音響ありし後約五分以上七八分の後海嘯来りしが如しと云ふ又潮の高さは刈宿山（海岸に突出したる山にして左まで高からず）も今十四五間にて打越されたる程なりしならんと――

○当夜町長某の発起にて軍人歓迎会あり此日朝より或降り或は霽れ陰晴常なかりしも一同は大槌より十余町離れ最も海岸に近き安渡に於て祝宴を開き狼烟を打揚げ夜に入りては烟花を大槌町の直下の海岸にて土人州崎と唱ふる處に移して打揚げ一二三発と進む中海上俄にガアーガアーと大瀑布の下るに髣髴たる音響なり烟火師三名人夫二名居合せ某側に見物に来れる小児等十四五名あり烟火師の一人に馬場力雄とて陸軍騎兵上りの人，人夫にコンナ音がすることがあるかと問ひしに人夫は珍しくありませぬと答ふ左らばと安心し四発目の烟硝を詰代へんとしてある間に天地も崩るゝ許りに怒濤侵襲したれば居合わせる一同は津浪々々と号呼する間に押流され馬場のみは十余町の陸に流され家屋の屋根を抜けて助命の幸を得たれども他の烟火師人夫子供は藻屑となりて死体すら分らずと――

○巨砲を海中に聴く　大海嘯当日大槌の漁師遥かの沖合にて漁業に従事せしが午後六時と

も覚しき頃大洋中に於て巨砲の響を聴きしかば眸を凝して四方を見渡したれど茫々たる蒼波の外大艦を見ざりしかば奇異の想ひを為しながら帰航し来たりしに果然此大海嘯あり漁師は一命を助かり居り彼の巨砲の如き響こそ海底に大異状ありし時にて大海嘯の原因も茲に在りしならんと震慴せり——

○漁者の言　当夜漁業に従へる人あり曰く常に魚を採る少し前にて鉄砲の如き音したり船かと見れば船はなし帰れば忽ち海嘯ありしと（中巻，pp. 23－24）.

［15－3］大槌町　○老女物語　海嘯の翌朝大槌八日町を六十前後の老婆ユモジ一枚にてぶるぶる慄へながらビショ濡になりたる十二歳許の孫の手を引き来るに此方よりも亦面部衣類泥だらけになり足は少し怪我をせしものと見へてビッコを引きたる五十前後の婆とハタと出遇ひ両人互にオヤ能くも生て居ましたなと言ひつゝ泣き出したり孫を連れたる老婆涙ふき敢へず彼の時海嘯来る音は雷様のやうに聞えたから私は驚いて一番小い孫を嫁に負はせてから此孫と一所になって永らく病気て寝て居る息子を呼起し外に連れ出さうとすると山のやうに波がかぶさって来て嫁は孫と共に流れ出し息子と此孫とは見へなくなりそれから私も何處ともなく流されて行ったところ幸ひ或る家の屋根に引懸り漸々命を助かったれど途方に暮れて屋根の上で只泣てばつかり居る折から直ぐに脇の屋根に子供の声でお婆さんお婆さんと呼ぶ者があるから近寄って見ると此孫が某所へ流れ来たを幸ひ四日町の人が来て救て呉れ——（下巻，p. 18）.

［15－4］　◎大槌町は大海嘯の当日は同町出身凱旋兵の為めに祝賀会を南端海岸の州崎に開き余興として多くの花火を製造し昼は海中に船を浮べて狼煙を天に漲らし夜は会場付近に於て之を打揚げたり去れば全町の有志家は朝来の雨を厭はず子女を伴ふて会場に参集し名誉ある兵士を款待し一同興に入りて夜の八時頃となれり而して花火は第四発目を打揚げ終りぬ折柄沖合に当りて百雷の一時に落るが如きを聞き人々奇異の思ひを為すうち地震を感すると同時に第二回の海上鳴動を聞きぬ此度は第一回に比して響きの高きこと幾層倍若しや海嘯に非ずやと疑ふ間に浜辺に在りし人の叫びとして海嘯海嘯と声を限りに呼立ぬ果然大海嘯は大山の崩れ来る如く極めて速なる勢を以て襲来れり（閉伊，p. 147）.

［15－5］　◎大槌町大砂賀菊池多助一家族は全滅に帰しぬ同家の別家に当る菊池東助の二男多蔵（十八才）の談によれは凶変当夜同多蔵も本家に行き居りし矢先き海鳴と均しく四隣海嘯海嘯と騒き立つる声に元来性急の多蔵大に狼狽し傍に遊ひ居たる多助の長男清（十才）を抱き門口に出てんとせしを反対に急かぬ性の多助多蔵を引留めなから海嘯とて左程急くには及はぬもの逃ける場合には各々家具の一草なりと背負ふて家内一所に出るものぞと優然構ひ居るに多蔵大に気を焦燥ちイヤ叔父さん大変火事イヤ大海嘯ですから早くお逃けなさいと絶叫せしは既に目前に逼りたる時にして此一刹那大狂瀾は見る見る家を蹴倒し家族は忽ち押流されつ——（閉伊，p. 153）.

［15－6］　◎安渡区の小国留助は——義兄富沢虎次郎——の長男鯉三（十一才）と次男英吉（七才）を伴ひ煙火を——英吉を肩に手に鯉三を携へて見物に行きしが間もなく外洋に当りてゴーゴーと凄ましき音せしにぞ留助早くも海嘯なりと察し直ちに件の両児を二渡りといへる高阜へ連れ行き——遂に一命は拾ひ得たり——（閉伊，pp. 154－155）.

［15－7］　◎道又繁太郎氏は僅に身を以て免れ山路を伝へて二渡りへ（村社）辿り行きしに友人の荻野清蔵なる人に出逢たり同人は——道又氏に対しては衣裳の着換やら焚火などして甲斐甲斐しく介抱せしかば同氏も為めに漸々人心付きしに随ひ父母妻子のこと思ひ出で少時も措く能はずせめて死骸なりとも捜索せんものと夫れより提灯を調度し荻野と共に——全力を竭して索め——帰途に就きし折からに路傍破材の下にて「お母さんヤイヤ

イ」と小児の泣声あり両人は斯くと見るより進寄破材を取片付けんとせしが力叶はず善き智恵も出でず困じ居たる處へ及川市太郎及長五郎の二人来掛りしを幸ひ相指揮して四人共々木材に手を掛けんとする時山手の方にて「海が鳴出して来たから早く山へ登れ登れ」と呼声ありければ市太郎はあはてふためき山路へ駈け登らんとせしを道又氏の為めに励まされ尚も四人一生懸命となり漸やく破材を取退けしに中よりは十二歳許の少女這出でしとぞ――（閉伊，pp. 158－159）.

［15－8］　◎大槌町役場雇横浜忠蔵氏は当夜（砂賀町）家に在りしが海嘯の音聞くと均しく先つ老幼を四日町（無難の地）に避難せしめ己れも今や戸口を出てんとする時忽ち潮水は戸を蹴て浸入しければ氏は壁を突破り隣家の屋根に這出でし――（閉伊，p. 164）.

［15－9］　◎大槌町四日町にて駄賃附を業とする庄之助といふは海嘯当夜馬に荷物を附け波板の海岸を通行の際図らすも路傍の電信線ビーンと計り音せしにぞ馬は驚きて彼方の小山に駈出したり庄之助は遣らじと手綱に取付き引戻さんとせしかど力及ばす手綱に取付きたるまま馬に引かれて山手の方十間程も行きしと思ふ間に海嘯は今来し海岸の路上に八九尺の高さを以て襲来りアア危機一髪馬の逸する今少し遅かりしならば庄之助の命は馬諸共無かりしなり因記す電信線の響きしは海嘯の為め釜石の電線切断せし際の反響ならすやといふ者あり（閉伊，p. 170）.

［15－10］　◎大槌江岸寺住職吉峯祖栄氏は凶変当夜其方丈の間に在り折から町方にて物騒かしく聞ゆる物音に只事ならすと跳ね起きて東向なる庫裏の障子を引明け見るに早くも第一の激浪勢込んて根板四尺以上を浸すと均しく向河原の各家ミリミリバラバラと凄じき音して境内近く漂流し来る有様此處彼處に老弱男女声を放つて悲鳴号泣助けを求めて急なり（閉伊，p. 171）.

［15－11］釜石市鵜住居

南閉伊郡鵜住居村は水海，両石，桑の浜，仮宿，白浜，箱崎，根浜，鵜住居，片岸，室ノ浜の大字より成り全戸数四百七十四，人口三千百五十三人ありし地方なるが村長の談話に拠れば去十五日午後四時頃より八時までに微震二回小震一回を感ぜしが孰れも左まで気に留めざりしに八時二十分頃爆然たる一声轟き天柱摧け地維拆くるかと思ふ瞬間に大海嘯は天を捲て来り両石，水海，箱崎の南部及片岸に於ける民家は一挙にして微塵に破砕せられ人命及家財の損害其幾何なるを知らずと云ふ（上巻，p. 28）.

［16］釜石市両石

［16－1］両石村　白木澤孝といふ医師あり就て被害当日の景況を問へば曰く当夜患者の家に出診し帰りて席に就くや否や百の砲門を開きしかの如き響きして海の湧くを聞きしかば扨てこそ海嘯と呼びも敢ず細君の手を取る此時遅く彼時早く数十丈の洪濤天を蔽ふて臻り――（中巻，p. 23）.

［16－2］　◎鵜住居村役場助役澤口舛吉氏は――点燈頃を以て両石に着し先つ兼て知合ふ其家に打寄りて高橋教員を招き相語らい居たる處へ是も一友人たる同地医師白木澤孝方に雇はれ居る薬局生内藤某も来合せ三人一団となりて酒肴なと取寄せ杯を獻しつ酬されつ面白可笑しく飲み合ひし折柄彼の大砲の如き響と共に大海嘯は俄然として迫りたれバ三人は周章狼狽散々になりて逃避したり即ち内藤は同家の二楷に上り澤口氏は鵜住居指して平地を一目散に走りしが両人は遂に激浪の襲ふところとなり敢なき惨死を遂けたりしも独り高橋氏は山手へ駈上りたる為め無難なるを得たりと云ふ

◎両石区開業医白木澤孝氏に就て被害当日の景況を問へば曰く当夜患者の家に出診し帰りて席に就くや否や百の砲門を開きしかの如き響きして海の湧くを聞きしかば扨こそ海嘯と呼びも敢ず細君の手を取る此時遅く彼時早く数十丈の洪濤天を蔽ふて臻り――（閉伊，pp. 140－141）.

［17］釜石市

［17－1］　○巡査部長某は海上の鳴動を以て海嘯なりと推測し手早く屋根に這出でたれば其妻と愛児とを家根の破壊と共に海上に持ち去られて南端の岸に漂着し其儘気絶したれども後にて人の介抱により蘇生し今は共に治療を受け居れりと

○麦畑の中に座し居る帆船小安丸乗組房州人渡辺某の直話に依れば同人は十五日の夜上陸して宇澤村に在りしに沖合に天地も崩るゝ如き響せしを以て立出で見たるに（八時頃）五六町の間潮水一時に退き砂を現はしたれば奇変あらんを察し大音に海嘯々々逃げろ逃げろと云ひしに聞きたる者は忽ち高台に上りたる間もなく僅か一分間計にて沖合に真黒に山の如く高き浪逆立ちドードーと音して進み来り一面に押寄せたりと又同船に乗り居りし水夫の話に船は二挺錨にて止め置きしに忽ち押流され一挺は切断し一挺にて麦畑に止まりたり実に肝を冷やし生きたる空は無かりしが船内の人には何の異状なかりしと（中巻，p. 21－22）.

［17－2］釜石町　初めて海嘯を見たる人

六月十五日は昼より降雨あり薄暮頃四五回の地震さへありて海上一面に墨を流したる如く午後八時頃と覚ほしき頃大砲の爆発したる如き音を聞きたるが折りしも釜石鉱山所有船の船長土井某は海岸に出で居りしに濃霧朦朧と立籠めたる海面の一層暗黒となりて見るも恐ろしき浪柱の現はるゝを認めしかばスワ海嘯よとて遁出でんとせしに此時早く彼時遅く山なす大波ドットばかりに押寄せ来たりて船長をも巻き去らんとせしにぞ船長は咄嗟の間に流れ来れる材木に縋りて波のまにまに漂ひて小高き方へ泳ぎ行き辛うじて一命を拾ひ得たりと云ふ材木のお陰にて命を拾ひたるは此船長のみならず一本の松の木にて十人の命を助かりたるものもありと

○海嘯の来りたる区域は　海岸より十二三町にて三之橋際迄なり海嘯の来りたる時は大砲の如き音の聞えしより少しく後にして若し此音を聞きたる時海嘯の来りたるを認むれば或は遁れ得たるやも計られず海嘯の地面を襲ひたる際は頗る激甚にして二分間も経たぬ間に釜石全村は流亡し数千の死傷者を出したりき——海嘯の来りたるは都合三度にして第一の者最も甚だしく次第に弱くなりて翌日の午前三時頃には全く退き去りたりと——

○技手身を以て免かる　山本技手の旅宿は海岸を距る五町ばかりなる津村と云ふ高台の所にありたるが技手は旅宿に帰りたる後入浴をなし晩酌を傾むけなどして居たるに午後八時過と覚しき頃何やらん怪しき響の聞えたれども同日は雨天なれば空気の塩梅にて鉱山通ひの汽車の響くならんと思ひたるが響は益々激しくなりて人の叫び声さへ雑りけるにぞ二階に出でゝ外面を見やりしに暗さは暗し何事なるやは分らざれども汽車と思ぼしき響は鉱山の方に聞えずして却って手近なる海岸の方に聞えたれば偖ては海岸の地の割けて水の湧き出したるならんと思ふ間もなく旅宿の家内は水が来た水が来たとて大騒ぎをなすより技手は其儘二階より飛下りて後の崖に攀登りたりき技手か崖に登るや否や浪の音は蛟竜の吼ゆる如く人家の壊る音物凄く助を呼ぶ悲鳴の声は恐ろしき響の間に雑りて天地も茲に覆りたるかと疑はれ気も魂も身に添はず暫時茫然として居たりしに凡そ三十分ばかりを経て浪の退きたれば海岸に在る立標事務所を見舞はんとて件の崖を降りて三十間ばかり行きたるに這はそも如何に釜石町の人家は悉く浪に引かれ行きて柱とも云はず闕とも云はずバラバラとなりて高丘の下に堆積し道も容易に通ぜざれば——（下巻，pp. 15－17）.

［17－3］　◎釜石町小軽米汪氏は県会常置委員として又敏腕家として其名声近闔各地に喧伝せらる氏は海嘯の当夜山口警察署長服部町長を一間の小奇麗なる座敷へ請し酒酌みかはして四方八方の談話に余念もなかりし折柄不図遥か沖合に当りて轟然雷吼の音を聞きしと均しく市中非常に物騒がしければ這は只事ならずと町長は真先に門外に駆出して当夜の奇災を免れたり警部も継て雨戸推開きて屋前

に出つるや遂に潮水に押流され幸に生命には別条なかりしも重傷を負ひたり――（閉伊，p. 114）.

［17－4］　◎白浜区佐々木ミヨ（三十七才）は家族十一人の暮しなりしが激浪家を捲くと共に一同押流され僅かに六歳の子と自身のみ生存せり今其実況をミヨに就て聞くに其夜は端午の当日なればとて酒餅を供して相祝ひける折柄別に音もなく兆もなく俄然捲取られて――（閉伊，p. 132）.

［17－5］　◎同（平田區）小学校訓導佐野和助氏の遭難状況を聞くに同氏は平常校内に寄宿し居ることとて其夜は川崎酉蔵の倅訪来りて何事をか同氏に依頼せしかば同氏も早速承諾為し軈て同倅も立帰りたる後氏は将さに寝に就かんとする時地震に伴ひ来る海中の鳴動に不思議やと戸を排し出てんとする一瞬間渦く波は学校を押倒して山路の方へ打揚けたるが----同学校は渺茫たる滄海に瞰み所謂海を枕にすといふの位置に在れば第二回の波にて一塵をも残さず呑却せられしと云ふ（閉伊，p. 138）.

［18］釜石市唐丹

［18－1］唐丹村の惨状――今当日の状況を聞くに午後八時十分頃（釜石より二三十分早かりしが如し）轟然たる音響の聞こゆるや否や分秒の猶予もなく幾丈の濁浪滔々として一瀉千里の勢ひを以て襲ひ来りアハヤと云ふ間もあらせず火山の破裂したらんが如く水烟濛々として立塞がり眼前咫尺の先きをも見透すこと能はず其の物凄きこと言はん方なし且つ其の勢ひの烈しき大木を折り家屋を破壊し所謂る将棋倒しよりは数層数十層も烈しく其のバタバタと倒されたる家屋は微塵に砕けて一として原形を存するものなし以て其如何に急激なりしやを察するに足らん（上巻，p. 24）.

［18－2］海上に命を拾ふ　唐丹の漁夫四十二人漁船三隻に分乗し鰹猟の為め海上遠く出漁し居りしが何か沖合に音響の聞えしやうなりしも別段浪も立たざりし由にて無事に其翌日帰村せり，是れ人の休める節句に稼きたるお陰にやあらん（上巻，p. 24）.

［18－3］唐丹村　○落雷と間違へて戸を鎖す　本郷の雲南治三郎は海嘯の起らんとするとき大なる音響を聞きて落雷なりと思ひ誤り周章狼狽戸を鎖して家内に蟄伏せしに家屋は怒浪に拍たれて粉砕し一家無惨の最後を遂げたりと（中巻，p. 18）.

［18－4］釜石市小白浜

鈴木トミは当年十九歳にて負傷者の一人なるが当時の情況を語るを聞くに轟然たる響をきいたかどうかも能くは覚え居らぬ位にて何事かと思ひ庭先に駈け出す内に早漫々たる波の上に在り――（中巻，p. 17）.

［19］気仙郡三陸町吉浜

吉浜にては激浪百尺以上に達し抱囲の巨木半バより折れて海に向て倒れ丈余四方の巨巌崖下に落ちて路上に横はり――

吉浜村より越喜来に至らんとする途中に三軒家を為せる家屋あり酒屋へ三里の趣はあれども家内の勉励にて不自由なく暮し居たるに某中の一富家たる橋本与右衛門なるものは家内十三人ありて其主人は四十五六の人なるが轟然たる響と共に海嘯の押寄せ来りたるに心附きて逸早く家人に逃げ出せと云ひつゝ自分独り真先に裏口より飛出したるも家族は一人も未だ出で去る能はざる（下巻，p. 11）.

［20］気仙郡三陸町綾里

［20－1］午前十時に激響を聞く　海嘯当日綾里村の西北四里半計りの處にある五葉山（気仙郡第一の高山）に檜の木を伐採しつつありし樵夫鮪船松魚船等に乗り組み気仙沼沖に掛り居たる漁夫は午前十時頃に於て太平洋上に雷の如く砲の如き激響の起るを聞き，又午後七時に於て激震に接触せり（上巻，p. 23）.

［20－2］十五日午前十時頃なりき綾里村を距る約十里の地にある五葉山に於て官林払下の檜樹を切り居たる木挽は綾里村方向に当り砲声の如き響を発せるを聞き午後七時頃再び山岳の鳴動ありしかば何事ならんと不審の念

を起し居たるが当日は恰も陰暦端午の節句に当りし故村民は各々祝酒を傾け或は親戚の家に到りて団欒の楽を為し居たりしに八時半頃に至り波光の映ぜしにやあらん白煙の如きもの湾の一面を蔽しと見しが忽ち四丈乃至五丈の海嘯一時に寄せ来たり未だ三分ならずして山手を除く外は全村悉く水中に包まれたり——

○遭難者の実話　綾里村字湊に住みし医師木下良斉は遭難者の一人なり当時の実情を語て曰く午後八時半頃なりき大津浪よと云ふ声を聞きしが席を起つに遑あらずして塩水は早や家屋を充満した——（下巻，pp. 9－10）.

［21］陸前高田市小友町

○洪波の逆襲三回に及ぶ　小友村に黄川英次と云へるあり——海嘯当日は恰も帰村の途次予て懇意にする唐丹村字荒川の某方へ立寄りしに刻は午後七時頃とて主人は旧端午の祝ひに酒打ち酌みてありけるが黄川の入り来れるを見，一杯飲まずやと献るをば黄川は此清水峠一ツ越せば御方（妻と云ふこと）が待ってる，又御馳走になりませうとて仇口交りに某方を出で艫て清水峠に差掛りたるに遥かの那辺に当り御どろおどろと鳴り響く声の起りければ黄川は夕立にもやと気遣ひつゝ峠を越え見れば一穂の青燈細く我家を認めたりハテ嬉しやといそぐ程に来る程にコハ抑も如何に轟然一発巨砲の声揭て加へて一面の大海原煌々たる白色光を顕出し雪山の一時に頽れ落ちたらん如き有様となるにぞ茲に始めて大海嘯の襲来なるを知り——

尚彼の目撃談とて後日人に語るを聞くに第一回の濤勢は慥に六丈余に達し第二回は第一回に比し凡そ一丈位は低く又第三回は第一回と甲乙なかりしとぞ（下巻，pp. 8－9）.

［22］陸前高田市広田町

［22－1］○誰かと思へば祖母さん　広田村小西幸太郎なる者の直話によれは同人は海嘯の当日沖に在りて漁を為し居たるに陸地の方に当りて只ならぬ物音聞えしにぞ異変あらんとて急ぎ帰途に就きたるに向ふの方より床板の上に乗りて九十余の老婆波間に浮沈し来りたりさては海嘯かと之を熟視するに豈に図らんや是ぞ己が祖母ならんとは——（中巻，p. 15）.

宮城県

［22－2］本吉郡唐桑町

本吉郡唐桑村字大澤農業

吉田忠助（五十九年）

本人ハ小松兼吉千葉甚作ノ三名ト共ニ同字ノ内「シナバ」ト称スル所ノ塩煮竈屋ニ於テ製塩ニ従事中六月十五日午後八時頃高山ノ崩ルルカ如キ音響ヲ聞キ何事ナラムト部屋ヨリ駈ケ出テ海面ヲ見ルニ櫛形ノ大浪奔騰シテ字館ノ内八幡岬ノ方面ヨリ押シ寄セ来ルヲ認メ或ハ海嘯ナラムト疑ヒ竈屋ニ入リ他ノ両名ニ伝フル間モナク泳キ来レハ忠助甚作ノ両人ハ背後ノ山ニ攀チ登リ助カリシモ兼吉ハ溺死シ竈屋ハ流失セリ（宮城，p. 401）.

［23］本吉郡唐桑町

［23－1］宮城県の北部に於て最も悲酸の情に堪へざるは唐桑村なり初め海嘯の起るや砲声の如き音二回ありしかば人々何事ならんかと思ひ居れる中八時半にいたり高さ平水より六丈に上れる海嘯疾風の勢を以て浸入し来り瞬時に家を漂はせ数丁の奥に打揚げたり此の間僅々二三分間なれば全く絶命しきらぬもありて翌朝に至るも尚悲鳴の声絶えず（上巻，p. 20）.

［23－2］海嘯中に突進す　唐桑村字只越の予備歩兵根口万次郎は日清戦争以後は護国の精神益々盛んにして何時敵国来寇するやも計かるべからずと治に居て乱を忘れずとの古言を守り常に其準備をなし居りしか海嘯の当日大船の駛る如き響あると共に轟然たる大砲の如き音の聞こえしよりスワ敵艦来れりと急ぎ用意の軍服を着け劔を提げて海岸に突進するや山なす怒濤に捲き去られて行衛知れす其後浜辺に死骸漂着せしに尚ほ劔を放たざりしと（挿図参看）（上巻，p. 21）.

［23－3］本吉郡唐桑村字小鯖商業

小山鶴治（三十年十月）

本人ハ当夜感冒ニ罹リテ宅ニアリシカ汽船ノ疾走スルカ如キ音響ヲ聞クヤ早已ニ床上三尺余潮水浸入シ来リ忽チ谷奥ニ向テ凡ソ二百間計リ押寄セラレ我知ラス材木ニ乗リシ――暫クスル中同村――ノ六名船ヲ漕キテ救助ニ来タリ――右救助船ヲ出シタルハ吉田源蔵ナルモノナルカ同夜不意ニ異常ノ音響ヲ聞キ海嘯ナラムト思惟シ小鯖湾ニ繋留シアル蛭船ノ安否ヲ心配ノ余リ雨ヲ冒シテ小鯖ニ至ルヤ――大災アリシコトヲ知リタリ依テ六名カ船ヲ出シテ救援セントスル（宮城，pp. 390－392）.

［23－4］本吉郡唐桑村字小鯖商業松之助

孫　亀谷秋蔵（十八年九ケ月）

本人ハ六月十五日同字商業鈴木利三郎宅ニ至リ利三郎ノ長男鈴木純七（二十年）ト雑話中午後八時頃大砲ノ如キ音響ヲ聞クト同時ニ続テ二回計リ地震アリシ後雷霆ノ如キ激響アリシヲ以テ何事ナラムト中仕切ノ戸ヲ開クヤ臺所ノ土臺際ヨリ潮水噴キ出ルヲ見テ此ハ海嘯ナラムト直ニ座敷ニ帰ル間モナク潮水充満シテ床板浮ヒ両名トモ畳ト天井ノ間ニ挟マレ苦悶ニ堪ヘサル故手ヲ以テ天井ヲ突キ上ケテ這ヒ上リ――（宮城，p. 392）.

［23－5］本吉郡唐桑村字鮪立漁業

鈴木人吉（四十二年）

本人ハ当日午後七時頃夜食ヲ了リ妻たま孫喜太郎ノ三人ト座敷ニ假寝ヲナシ弟捨太郎同人妻きち長男仁三郎――臺所ニ於テ雑話ヲナシ居リシニ同七時五十分頃大砲ノ如キ音響アリシ故不審ニ思ヒ長男仁三郎カ臺所ノ戸ヲ開キテ始メテ異変アルヲ知リ海嘯来レリト呼フニ何レモ大ニ驚キ直ニ座敷ノ障子ヲ一尺計リ開キ見ルニ三間計リ先キニ五尺余高キ白浪来ルト思フ間モナク家ニ打当リきよト共ニ北隅ナル壁ニ突キ付ケラルルヤ壁貫ケ二人共背後ノ山ニ打揚ケラレシ――（宮城，p. 393）.

［23－6］本吉郡唐桑村字鮪立寄留商業

丹野賛之助（三十九年四月）

本人ハ六月十五日午後六時頃同字商業村上定吉来リ対酌中午後七時四十分大砲ノ如キ音響アリシヲ以テ不審ニ思ヒ如何ナル変事ヤ起ルヤラムト二回ノ音響毎ニ時計ヲ見居リシニ須臾ニシテ村上ノ暇ヲ告ケ戸口ニ出ツルヲ以テ之ヲ見送ラントテ夫妻共ニ戸口ニ至リ暫シ直立シ居ル中俄然頭上ヨリ水溢レ掛リシカハ互ニ何事ナラムト言フ間モナク潮水ハ已ニ室内ニ充満セリ――（宮城，p. 395）.

［24］気仙沼市

［24－1］本吉郡大島村字横沼漁業伊藤養之丞妻　　まつの（三十四年）

本人ハ当夜長男養助（十二年）次男泰治（七年）三男由吉（五年）ト共ニ就寝中激浪ノ音響ヲ聞キ最初ハ雷鳴ナラント思ヒ居リタルニ忽チニシテ激浪ノ浸入スルト同時ニ家屋破壊シ四人共海中ニ押シ流サレシ――（宮城，pp. 403－404）.

［24－2］本吉郡鹿折村字鶴ケ浦農業

小松つめ（四十四年）

本人ハ当夜雷ノ如キ音響アリ追々近ツキ来ルヲ以テ何事ナラムト戸ヲ開キ海面ヲ見ルヤ此時遅ク彼時速ク激浪空ヲ捲テ襲ヒ来リ潮水忽チ室内ニ溢レ――（宮城，p. 403）.

［24－3］唐桑村にては海嘯襲来せし時の状況を気仙沼警察署長上田景安氏の談話によりて記さんに曰く

十五日夜八時三十分，巨砲の音の如きもの轟然として二度迄聞へたり，当地は其後何事もなかりしかば本官等は只遠雷の響とのみ思ひ居たりスルト十時過にもあらん唐桑より一人の男来り「唐桑に水が増しましたと」の報告を得たり――兎角する程に階上村役場より急使来たり海嘯あり人畜の死傷無算との報告あり――唐桑駐在所巡査の談話によれば当夜の浪は六丈余の高さなり――（中巻，p. 13）.

［25］本吉郡本吉町大谷

［25－1］　○大谷局長遭難の実況　大谷村の郵便電信局長小野寺久蔵氏の遭難せし実況を聴くに海嘯の襲来せしは十五日午後七時なりしが当日は旧暦節句なるを以て各戸祝酒を傾け海嘯襲来の頃には酔倒したるものもあり小野寺局長の如きも十分酔気を帯び居りたり

其家族も食事中にて海嘯の来たるべしとは夢想だもせざることなれば遠雷の如き響きを聞きて雷ならん抔と評し居たり長男丈吉の妻某なるもの台所の戸をあけしに海水漫々たるより大声に水なりと叫びたれば局長は驚きて跳起き雨戸を開きて逃出んとしたるも最早逃出すべき道なければ家族のものに自分に取付けと云ひ戸袋の柱に取り付きたるに忽ち家屋は山の方に押し流さるゝ(下巻，p. 8).

［25－2］本吉郡大谷村大字大谷二百四十二番地

平民栄蔵弟　小野寺貞七（七十七年）

六月十五日兄栄蔵ハ流網漁ノ為メ出船不在ナリシカ午後八時頃頻リニ鳴動アリ最初ハ近所ノ挽臼ノ響ナラン抔話シ居リシカ漸次音響強マリシ故或ハ浪ナラント思ヒ自分ハ坐敷ノ障子ヲ明ケ海上ヲ瞻ルニ変状ナカリシヨリ再ヒ爐邊ニ来ル間モナク潮水浸入シ爐中ノ火ヲ消シゝカハ不審ニオモヒナガラ坐敷ノ間ニ出テ見レハ激浪既ニ厩ヲ浸シ今ヤ居家ヲ襲ハントスル勢ナレハ迯ルゝ暇モナク忽チ浪ト俱ニ二百間以上町上ノ須賀ト稱スル處マテ流サレ瞬時ニシテ須賀濱方面ヨリ襲来ノ激浪ニテ小島ト稱スル邊マテ逆流サレシ――（宮城，pp. 404－405).

［25－3］本吉郡大谷村大字大谷百四十五番地平民利平弟漁業者佐藤利四郎

妻　いと（四十五年）

本人ノ夫利四郎ハ遠島ノ大網ニ出稼中ニテ自分獨リ在宅ナリシカ午後八時頃轟々響渡ル音ヲ聞キ単ニ雷鳴ナラムト思ヒ居タルニ稍暫ク経ルモ其音響ノ止マサレハ不審ニ思ヒツゝ戸外ニ出テゝ往来ヲ見ルニ海濱ノ方ヨリ膝丈位ニ水ノ押シ流レ来ルヲ見テ不審トハ思ヒシモ其儘戸ヲ締メテ内ニ入リ爐邊ニ坐シ居タルカ「バチバチ」ト云フ音ノ聞ユルト同時ニ浸潮ノ為メ坐シタル儘屋根際ニ押揚ケラレ――（宮城，pp. 405－406).

［25－4］本吉郡大谷村字平磯六十二番地平民漁業　三浦萬次郎（三十八年）

六月十五日ノ夜ハ家族六人共團欒シ居リシカ午後七時過キ雷鳴ノ如キ響アリテ漸次地響烈シクナリシカハ唯事ナラスト思ヒ妹すえの（十八年）ヲ戸外ニ出シ海上ヲ見セシメシニ「浪カ来タ」ト云ヒツゝ家内ニ入ルヤ妹ノ夫半治ハ家ヨリ駈ケ出シ海嘯ナリト呼ヒシ儘何レカヘ出テ行ケリ母りよ妹くまの同えすの孫みとりト自分ハ家内ニ在テ半治ノ海嘯ナリト呼シヲ聞クヤ母ハ孫ヲ懐キシ儘臺所ヨリ中坐敷ニ遁ケシカハ自分モ其後ヨリ續テ中坐敷ニ片足ヲ入レシニ潮水早クモ坐敷ニ浸入シタレハ母ヲ救ヒ出サントスル間モナク再度ノ激浪襲ヒ来リ半ハ破壊セル家屋ト共ニ海上沖合三百間以上ノ處ニ押シ流サレ――潮浪ハ都テ三回襲来セシカ二回目ハ最モ激烈ニシテ最初ト三回目ハ稍緩ナリシカ如ク襲来ヨリ退潮マテノ時間ハ實ニ瞬速ニシテ僅カニ三四分位ト覚ヘタリ（宮城，pp. 407－408).

［25－5］本吉郡大谷村字平磯六十四番地平民漁業　大原東五郎（二十四年）

本人ハ大谷沖鮪大網櫓見張番トシテ日々出懸ケ居リシカ六月十三日ヨリ同十五日海嘯襲来当日迄東北ノ方位ニ於テ数回大砲ノ如キ音響ヲ聞キシカ当日音響アリテ凡ソ三十分程経タリト思フトキ海嘯襲来セリ同夜ハ家族一同就蓐セシカ間モナク（午後八時過キ）母ニ沖カ鳴動スレハ唯事ナラスト云フテ起サレシ故戸外ニ出テ海上ヲ見ルニ明神崎（平磯濱ノ突出シタル崎）ヨリ内濱ニ前後二重ナル高浪（前浪ハ凡ソ二丈余後浪ハ四丈余）ヲ認メシカハ大ニ驚愕シツゝ居宅ニ駈ケ入リ戸締ヲ為シ二歩計リ進ムヤ猛烈タル激浪ノ屋内ニ襲来スルト同時ニ自分ハ屋根ノ裡ニ押揚ケラレ妻ハ当歳ノ女児ヲ抱キシマゝ浪ニ取ラレテ絶命セリ家屋ハ瞬時ニシテ沖合四百間程退潮ノ為メ押シ流サレ――（宮城，pp.408－409).

［26］本吉郡志津川町

［26－1］　細浦――少年は潜然涙を流して曰く当夜余は父と与に家にあり俄然怒濤咆哮の響起ると与に身は何時しか床より押し上げられ屋根裏にまで圧迫せられて身動きも為し得ず（上巻，p. 18).

［26－2］　清水――三十位と思わるゝ一女子あり此の女子は歌津より清水に嫁せる者にて疾に所天を失ひまゝ子を育てゝ一家七人無事に世を送りありたる海嘯の日は，夕飯を了りたれば煙草を喫まんと煙管を持ちたる時凄まじき音して，アナヤといふ間に家は潰れ，其身は脛を挾まれて，水中に没せり（上巻，p. 19）.

［26－3］清水村　渡辺清水男と呼ぶ者あり6月十五日の夕暮は或る近隣の友人と茶を汲み足を伸して談笑しつゝありたるに午後八時頃沖合俄に轟然として雷の如き音聞えしにぞ両人は期せずして談話を中止し暫く耳を聳てしに友人は「是りや海嘯じゃ」とて遽だしく立ちければ渡辺も共に飛出でて沖合を眺めたるにこはそも如何に山なす大濤渦巻打て早や眼前に迫り来たり――渡辺の話によれば海嘯襲来の模様は一時に打撃し来りたるにあらず初は低く漸次水嵩を増し中間両三度巨大の波濤洶湧して遂に此惨況を来したるものなりと此の如くなるを以て初め家屋は破壊せずして其儘浮き上り漂流して両山の間に持ち行かれ此所にてガブリと大波を受けたる為一時に悉く倒壊したるものなりと（中巻，p. 12）.

［26－4］清水浜村　○孝子天助を得　清水浜に一の孝女現れなり盲人佐藤長次郎の一女蓮は当時沖合にて百雷轟く如き声を聞き長女某を抱きたるまゝ戸を開き見れば五丈余なる大浪の寄せ来る有さまに抱きたる我子を捨て盲目なる父を背負ひ昨年夏頃より病蓐に呻吟し居る母よしの片腕を引き之を救ひ出さんとする――（下巻，p. 7）.

［26－5］　五丈の濁浪　歌津村に於ては轟然たる響音を聞きて軍艦の砲声にはあらずやと思ふ間もなく五丈余の濁浪渦巻き来たりて家屋を捲き去り一村七十余戸の内僅かに十七人の生残れるのみ清水浜にては二戸を余して六十余戸押流され其他十三浜村，入谷村等皆非常の損害を被れり（上巻，p. 19）.

［26－6］　海嘯の襲来　志津川町は去る十五日は朝来晴天にして海上も静穏なりしも午後五時頃に至り一天俄に掻曇り大雨沛然として篠衝くばかりなりしが続いて十数回の地震あり人々不安の念を懐き居りし内午後八時とも覚しき頃轟然として雷鳴の如き響きありこは何事ぞと訝る間もなく海嘯々々と泣き叫ぶ声此處彼處に聞え沖の浜は三戸を余すのみにて四十余の家屋は瞬間に濁浪に捲き去られ同時に埋立地も人家悉く洗ひ去られたり（上巻，p. 16）.

［26－7］　○海上に於ける状況　志津川町の漁夫は海嘯の当日海上に鮪漁をなし居りし為め此危難を免かれたるが其語る所に依れば十五日午後七時半頃海洋に於て大砲を打つが如き大なる響を発したるより何事なるかと其方角を眺むれば風もなきに海水山岳の如く高まりしに何さま海中に異変あるに相違なからんと急に網を引揚げて帰航の用意をなせしが山岳の如く高まりたる海水は中間より二つに分れて南北に走り急に潮流烈しくなりしに間もなく南北沿海岸に打当りなる響甚だしく暫時にして南北海岸に篝火提燈の光を認め陸上大動揺の模様あるにぞ始めて海嘯ありしを悟り陸地に向けて船を進めしに唯潮流の速かなるを覚ゆるのみにて別に舟行に差支へなかりし左れども陸地に近づくに随ひ波浪益々大にして危険少なからざるより其夜は洋中に留まり翌日浪の静まるを待て無事に帰り来りしと云ふ（上巻，p. 17）.

［26－8］　○風声鶴唳に驚く　志津川町にて去る二十一日午前九時頃老若男女が異口同音にソレ海嘯が来たと騒ぎ出し全町到る處上を下への大騒動――時経て海面を望めば更に斯る気色の見えざるに孰れも不審の事よと噂し合へる――何から又斯る騒動を引起せしものかと後に聞けば同町沿岸の近傍に碇泊中なる小汽船が其汽缶の湯を吐かせしに其音の如何にも十五日の海嘯前に聞えたる響に似たるより誰云ふと無く海嘯と訛伝したるが為めなりしと云ふ――

ここに騒きの中の滑稽といふべきは当町民某ドヲーンといふ響きを聞くやソラ敵の砲撃だ

ぞと叫び飛出して夢中に馬を引き出せしが既に己が家の流れしを知らずふりかへりて大なる屋根の浮ぶを見軍艦と思ひ違へ魯西亜が魯西亜がと連呼しつつ腰を抜かしたりとぞ（中巻，p. 11）.

［27］追波湾

［27－1］本吉郡十三濱村大指區漁業者
西条萬治郎娘　とめ（十五年）

本吉郡十三濱村大室區ハ戸数二十二戸ノ内七戸流潰十四戸死亡者十三人負傷者六人アリシカ何レモ雷鳴ニ和シテ汽車ノ進行ニ等シキ音響ヲ聞キ區々ノ憶説ヲナシ居ル一刹那大山ノ一時ニ崩ルゝカ如キ猛勢ヲ以テ大浪打チ上ケタレハ其レ海嘯ヨト叫ヒツゝ逃カレントスル間モナク重ネ来ル高浪ハ一層ノ激烈ヲ加ヘ家屋家具ヲ微塵ニ砕キ人馬共ニ押シ流サレ且ツ押シ戻サレ燈火ハ消滅シテ前後ヲ弁セス――（宮城，pp. 415－416）.

［27－2］桃生郡雄勝町

追波湾ニ於テハ十三濱沿岸ハ東北方ヨリ東南方ニ漸次浪ノ高サハ減少シ，其南端ノ差約十一呎，同湾ナル名振濱ニテハ軍人ノ語ル所ニ依レバ浪ハ東北ヨリ轟々タル音響ヲナシテ襲来シ八系嶋ノ為ニ大ニ勢力ヲ減殺セラレ幸ニシテ被害尠カリシト云フ（伊木，p. 19）.

［28］桃生郡雄勝町

［28－1］雄勝集治監出役所-----署長は中村欣一氏なり扨十五日の夜は余等監守は監側の合宿所（独身監守十九名の寄宿所）に在り-----八時十分とも覚しき頃殷々の声遥に起りて風声雨声交々到るが如き物音を聞く扨は夕立かと思ふ間さへあらせず百瀑の一時に圧下せるが如き勢もて海嘯は監の外構ひを衝倒し見る見る合宿所，倉庫，炊所，事務所を薙ぎ倒し本監を呑み了れり（上巻，p. 13）.

［28－2］雄勝出役所海嘯被害の詳報

一，出役所は湾を前に控へ殊に合宿所の位置は最も其付近に在りし為めに激浪の真向に蔽はるる處となり轟然凄まじぎ鳴動を発するや当夜休憩する所の看守十六名只事にあらずと各糾合戸外に出で上官の指揮命令に従事する途端激浪怒濤の間に捲き込まるゝ所となり其内八名は辛じて万死に一生を得たるも余は生死不明内一名の死体は翌朝に至り出役所より一丁程高所の叢の中より発見せり

一，監房に於ては宿直看守前と同様の鳴動を聞くと同時に一人が大海嘯来れりと報ずるや激浪襲侵板塀を押し倒し立ろに監房の中に六尺以上氾濫した（中巻，pp. 9－10）.

［28－3］雄勝濱

一，同出役所ハ湾ノ正面ニアリ殊ニ看守合宿所ノ如キハ之レニ接近スルノ故ヲ以テ海嘯ノ真向ニ襲ハルゝ所トナリシ由ナルカ当夜休憩ノ看守十八名ニシテ終日ノ劇務ニ身体疲労シ半ハ寝ニ就キ中ニハ書見中ノ者モアリシト云フ今此ノ内ニ在リテ存命セシ者ノ咄ヲ聞クニ時恰モ午後八時二十分頃海面ニ当リ轟然物凄キ鳴動ヲ発シタリ急破コソ海嘯起レリト各呼ヒ合戸外ニ出ントシテ孰レモ臺所マテ疾走シ来リシニ此時早ク彼ノ時遅ク實ニ咄嗟ノ間既ニ激浪怒濤ノ内ニ包マレ床板ハ破竹ノ如キ響ヲ為シテ天井裏マテ刎付ラレ身体ハ板挟ミトナリ出ルニ途ナカリシモ ――（奥羽日日新聞）（宮城，p. 424）.

総　論

［29］

一，宮城郡

本郡七ケ浜村ハ六月十五日午後九時頃海上寅卯ノ方面ニテ雷鳴ノ如キ音響アリ居民何レモ何事ナラント怪ミ居ル内高浪俄ニ襲来シ海岸ニ繋キアル漁船ノ陸上ニ打揚ケラレタルモノアリシモ堤防及ヒ海岸ノ破壊ハ勿論人馬等ニモ怪我ナカリシ而シテ襲来ハ僅ニ一回ナリキ浦戸，松島，塩釜三町村ノ海岸ハ同日午後八時頃強震アリ又東方ニ当リテ大砲ノ如キ音響ヲ聞ケリ就中松島村ニ於テハ潮流急激ニシテ海上異状アルヲ認ム然レトモ三村トモ平穏ニシテ其ノ余波ヲ被ラサリシハ群島ノ間ニ点在セルヲ以テナラン

二，名取郡

本郡ノ沿海六郷，東多賀両村ニ於テハ六月十

五日午後八時三十分頃俄然波濤ヲ起シ襲来ノ響恰モ遠雷ノ如クナリシ而テ海嘯ノ浸入スルコト三回ナリシ

三，亘理郡

六月十五日午後九時十五分頃本郡東北即チ太平洋沖合ニテ数回遠雷ノ如キ鳴響アリ最後ニ轟然一大鳴動ヲ発スルト同時ニ海嘯ノ襲来アリ其ノ際山下村ニ於テ十数戸ノ家屋ヲ浸シ荒浜村ニ於テハ家屋ヲ浸サヽリシモ海嘯ノ高サ四尺以上ノモノ一回一尺以上二尺以下ノモノ二回襲来セリ

坂元村沿海ニモ海嘯アリ当初数十回ノ地震アリ次テ海中ニ百雷ノ一時ニ落チタルカ如キ激響アリタレハ居民驚愕シテ地震ノ前兆ナラン抔噂シ居ル間モ無ク海水急ニ押寄セ来リ同村字須賀一面ニ漲溢シ床上ヲ浸サレタル家屋六七戸破損セラレタル漁舟十四艘アリ磯浜ニモ亦多少ノ被害アリキ大浪ノ襲来ハ都合四回ナリシモ十六日ノ朝ニ至リ平穏ニ帰シタレハ格別ノ被害ナカリシ（宮城，pp. 383－385）.

［30］

岩手県被害報告

本日十五日は暮夜に至り数回の地震あり又午後八時頃東閉伊郡沖合に於て轟然一発巨砲を放ちたる如き轟音ありたれど沖合の鳴動は普通のこと或は軍艦の演習ならんと信じ更に意に介する者あらざりき然るに其轟音の歇むや未だ数分間ならざるに海嘯俄に至り狂瀾天を衝き怒濤地を捲き浩々として驀地押し寄せ来り（上巻，p. 5）.

［31］雑説

三陸地方地震津浪に附き地質学上の考説

理学博士　巨智部忠承　稿

三　地震の数　宮古町

発震時間	震動
午後七時三十二分三十秒	微　潰屋あり
（時間　五分　　方角　東北東　西南西）	
同　七時五十三分三十秒	同　海嘯あり
同　八時〇二分三十五秒	同　続震あり
同　八時二十三分十五秒	同　同
同　八時三十三分十秒	同　同
同　八時五十九分	同　同
同　九時三十一分三十秒	同　同
同　九時三十四分〇五秒	同　同
同　九時四十五分四十秒	同　同
同　九時五十分十秒	同　同
同　十時三十二分十秒	同　同
同　十一時二十二分	同　同
同　十一時三十三分十五秒	同　同

宮古測候所報六月十九日官報

備考　以上合計十三回の地震ありしも執も微弱震に過ぎざりし然れども七時五十分頃海潮は異常なる速力を以て干退し同時に遠雷の如き洪響を聞くや八時頃に至り海嘯襲来し一旦引退せしが八時〇七分再び畏るべき海嘯は一丈四五尺の高さを以て捲き来り人畜家屋を一掃し去り爾後六回の海嘯襲来したるを見たり而して波動は翌日正午頃まで続きしもそは左まで強勢にあらざりしと云ふ

同　測候所長談話

四　津浪襲来の状況　六月十五日暮方数回の地震あり午後八時頃東閉伊郡沖合に於て轟然一発巨砲を放ちたる如き轟音あり其音響の歇むや未だ数分時間ならざるに海嘯俄に至り狂瀾天を衝き怒濤地を捲き浩々として驀地に押し寄せ来り市街となく村落となく総て狂瀾汎濫の没する所と為り沿海一帯七十余里僅に一瞬間にして平砂荒涼死屍壊屋の累々たる満目惨憺たらざるなし

——

六　音響の有無　大砲の如き又は遠雷の如き響を聞くも各地皆然り独宮城県志津川於ては之を聞き得しものなしと云ふ日本新聞二四三九号に曰く前略而して彼の他の所にて何れも聞取せしと云ふ大砲様の奇響は独り此志津川に於て聞き得しもの一人だになかりき是頗る奇談たり云々

——

八　光明の有無　無数の怪火　野田駐在所の巡査遊佐某は海嘯の当夜所轄部内の宇野村を巡廻し午後八時二十分頃駐在所を距る十町許

の所迄帰りしに海上異常の鳴動を聞き怪しみながら野田に近づくや海潮は曾って見しことなき高處まで浸入せり真逆に津浪と思はざれば暫し佇み考ふる内に大さ提燈程の怪火其数幾十となく野田の民家の在る所より背後の山に懸て高低に幻光を発したれば云々
田老村字小港の山上に在りしものの話に時ならぬ濤声を聞く一刹那海水は三百間余退干して全く海底を露はし蒼白の異光燦然たるを目撃したり云々
――
九　前兆――
宮古に於ける海嘯襲来は前後六回にして初度の襲来は午後八時なり而して之に先だつ十分即同七時五十分海潮は異常な速力を以て干退し同時に遠雷の如き洪響を聞きたりと
――
志津川付近に於ては去る十三日頃より流潮擾乱して定流を変し十五日に至り老人曾て覚えざる程の干潮となり未た曾て見れることなき海底の凹凸を見たり而して其夕八時頃より三回の鳴動或は遠雷の如きもの起れり海嘯の襲来は実に八時十分なりしなり
（此の記事中には志津川に音響を聞くとあり孰れか信なるや）
十　三陸以外の津浪――
茂寄　北海道庁の報告に十勝国茂寄地方は十五日午後八時海上沖合に遠雷の轟くが如き響を聞き同時に微震あり地響殆と十五分間に亘る同十一時退潮時に際し俄然退潮平時より数十尺の差あり忽にして潮勢奔激六十尺乃至百尺の陸地に襲来し凄音を発して去来すること四五回初回は尤も激なりしと云ふ
――
十五　池上技手海嘯談
――何様今回の海嘯は突然にして毫も前兆を知るに由なかりき彼の安政二年江戸の大地震の際にも海嘯を起したれども当時は水勢の押来りし始めより逃避する迄に十分の余裕ありしも今回の如きは潮勢一度に押寄せ人々海嘯を呼ぶや彼時早く此時遅く激浪既に四面を蔽ふて避くるに遑なし或は最初雷鳴の如き音を聞きたりと云ひ又は大砲の如き響きを發したりと云ひて地震の響きにてもありしが如く想像し之を海嘯の前兆なりと一般に称ふれども右は震響にも非ず前兆にも非ず多分巨厳に激したるか或は他の関係にて海嘯の押寄する途中の水勢にて斯る音声を発したるものならん現に船中にありし者は一人も其の音を聞かずと云ふを以ても知るべし（中巻，pp. 1－4）.
［32］
雑聞
○海嘯と音響　今回の海嘯に就ては何處にても音響を聞けり宮城県牡鹿郡にては雷鳴の如き響を聞き歌津村にては砲声の如き音を聞き又志津川町にては大雨に続いて地震あり間もなく雷鳴の如き響きを聞きたり岩手県下久慈港にては当日午後八時半頃に烈風吹起り地震の如く雨戸鳴響き間もなく三四回凄まじき音聞えたり，又釜石町にては晩餐頃海上遥かに凄ましき音せしが其声次第に近づき且つ大砲の如き響き三回程あり人々驚きて海上を見渡すに濃霧一面に立塞かりて呎尺を弁ずる能はず何れも驚き慌てる折しも山なす海嘯襲ひ来りしなりと（下巻，p. 29）.
［33］
○海嘯襲来の時刻　唐丹村は六月十五日午後八時十分頃に起り釜石町は八時三四十分の間に起り山田村に於ては九時頃に起れりと云ふ其北方に至るほど時刻の遅きを見れば海嘯の南より漸次北に向へるを知るべし又其来襲の模様にも差異あり唐丹は極めて大きく激烈に一回来襲し釜石は僅かに間を隔てて二回の来襲あり山田町は一回の来襲幾分の猶予ありて二回目の来襲ありしなりと（下巻，p. 31）.
［34］
◎本郡々長一ノ倉貫一氏は六月廿七日を以て被害の状況を県庁に向ひて左の如く報告せり
南閉伊郡沿海町村海嘯罹災ノ状況
一罹災ノ現況
明治廿九年六月十五日朝来曇天ニシテ午後第

四時頃ヨリ降雨アリタレトモ海波静穏ナリシガ午後第八時ヲ過ギ大雨トナリ前后一二回ノ震動アルモ微弱ニシテ知覚セサル者多キカ如シ午後第八時二十分頃ニ至リ俄然異様ノ音響アルヤ否湾内怒濤ヲ起シ海水一時ニ暴漲し其高サ約四十尺以上ニ達ス即チ海嘯ノ第一次ニシテ此時過半ノ家屋ヲ倒シ瞬間ニシテ再ヒ激浪襲ヒ来ル之レ第二次ナリ此第二ノ激浪ヲ以テ現在ノ如キ惨害ヲ与ヘ海水ノ達セシ部分ハ殆ント一掃シ去リ更ニ前形ヲ止メサルニ至リ暫時ニシテ平水ニ復セリ（閉伊，p. 1）.

〔35〕

◎六月十五日宮古測候所概調報告左ノ如シ

——

海嘯ノ現象及其原因

今般ノ大海嘯ノ起始ハ（海水ノ始メテ退減シ始メシ時刻）夜間ノ如キハ観測シ能ハサレトモ凡ソ午后六時五十分頃ニシテ最初ノ地震後約十八分ヲ経タルナルヘシ其後十分時間ヲ過キ午后八時頃増水シ零時ニシテ稍々退減シ同八時七分ニ至リ最大劇烈ナルモノ真ニ轟雷ノ如キ響ヲナシテ襲来シ其后八時十五分，八時三十二分，八時四十八分，八時五十九分，九時十六分及九時五十分ノ六回ニ著シキ増水ナリシ勢力ハ漸次減殺セリ而シテ一大惨状ヲ呈セシハ第二回目ノ激浪ニシテ忽諸ノ間ニ幾多ノ生命財産ヲ一掃シ去レリ爾後翌十六日正午頃マテハ慥ニ海水ノ増減アレトモ頗ル軽少ニシテ精密ノ観測ヲナサザレハ知ルヘカラス又其著明ナル増減ハ往復八回其往復振動期ハ約十分内外ニシテ最大波浪ハ湾内ニ於テ約一丈五六尺ナリシ

——

彙報

管内各郡役所ヨリノ地震報告中未達ノ箇所アレトモ孰レモ当時各所ニ数回ノ微震アリテ過半南西，北西若クハ東，西ノ水平動ナリシ而シテ胆澤郡水澤町ニ於テハ大砲ノ如キ音響三回アリシト又二戸郡福岡町ニ於テ震動後十分ヲ経テ戸外通車ノ軌ルカ如キ声響ヲ聞キシガ夫ヨリ六分ヲ過キテ俄然頭上迅雷ノ轟クヲ遠キニ聞クカ如キ響アリ前後共其方位ハ東方ニアリシカ如シト報セリ

——

海嘯臨時報告

廿九年六月廿日付本所宛

西南閉伊郡役所

（摘要）本月十五日午后八時三十分前後地震アリ為メニ海水激騰大海嘯ヲ起シ其高サ五丈余沿岸ヲ襲来スルノ音響恰モ雷鳴ノ如シ忽チ沿岸ノ家屋ヲ浸スモノ数里ニ亘リ人命財産を蕩盡スルコト無算云々

同上六月廿三日本所宛

気仙郡役所

（摘要）本月十五日午后四時驟雨後細雨トナリ同九時ニ垂ントシ南東方ニ発砲ノ如キ音引続キ変動アリ（当時市街中ニハ心安カラサリシモノ多シ）沿海漁村ニ於テハ皆軍艦ノ発砲トノミ思ヒシニ暫時ニシテ猛烈ナル海水襲来時既ニ午後九時過暗夜咫尺ヲ弁セス概ネ避難ニ遑ナク家屋ト共ニ蕩盡セラレ——

被害ノ状況ヲ一見スレハ港湾ノ位置地勢ノ広狭ニヨリ一様ナラサレトモ概ネ洋中ニ突出シ且ツ大洋ニ面セル部分ニ被害多ク波浪ノ最高ハ凡ソ水面ヨリ百尺ノ高處ニ達シ最低ト雖トモ三十尺ニ下ラヌ——

同上六月廿七日本所宛

南北九戸郡役所

（摘要）去十五日午后七時頃ヨリ微震数回濃霧朦朧同七時三十分頃ニ至リ幽カニ鳴動スル二三回同八時二十分頃砲声ノ如キモノ二三回ヲ聞クト共ニ百雷ノ一時ニ轟クカ如キ凄マシキ音響ト共ニ数丈ノ波浪襲来シ忽チ人畜家屋ヲ捲キ去リ沿海ハ何レモ高所ナル山麓ヲ浸襲破壊セリ而シテ全ク退潮セシハ同八時三十分内外ナラン云々

山形測候所員ヨリノ通信ニ拠レハ当日同所ニモ地震アリ且遠雷ノ如キ響ヲ聞キ或ハ近県ニ大地震ニテモアラサリシカヲ疑ヘリト（閉伊，pp. 10−17）.

［36］
第二節　音響
被害地ノ多クハ津浪前ニ当テ二三回ノ速砲若クハ雷鳴ノ如キ音響ヲ聞ケリ，然レトモ其方位及ヒ津浪ニ先タツノ時間ニ在テハ随所各差異アリ，即宮城縣下本吉郡以南ノ地方ニ於テハ東北ノ方位ニ鳴響ヲ聞キ其時間ハ津浪襲来ニ先ツ事大概ネ数分内外ニシテ，岩手縣陸前国気仙郡沿岸ニテハ鳴響アルト同時ニ津浪押寄セ来リシヲ以テ里人皆洪浪ノ岩峭ニ激スルノ音ナリト云ヘリ，尚北位陸中三閉伊郡，南北九ノ戸郡地方ニ於テハ津浪ニ先ツ少時東南方位ニ鳴響ヲ聞ケリ而此音ハ遠ク北上川沿道ノ地，山形，秋田ニ至ル迄聞エタリト云フ
今此音響ナル者ヲ察スルニ今回ノ津浪ハ気仙郡ニアツテ正東ヨリ襲来シ其以南ハ東北方ヨリ以北ハ東南ヨリ来タリシ事ハ後章ニ説クガ如クシテ，之ヲ地形ニ照ラセバ三陸沿岸中気仙郡白濱附近ヨリ南閉伊郡宮古附近ニ至ルノ地ハ最モ東方ニ突出シ陸前本吉以南及ヒ陸中北閉伊郡九戸郡地方ハ漸次西方ニ偏ス（第十四図参看），故ニ波浪前述ノ方向ニ襲来スルトキハ白濱宮古一帯ノ地ニ先ツ激衝シ南北ニハ漸次遅延スルハ明かナル理ナリ，而シテ気仙，南閉伊地方ニ於テハ鳴響ハ津浪ノ襲来ト同時ニシテ夫ヨリ南北両地ノ人ハ各之ヲ東北及ヒ南東ノ方位ニ聞キタルヲ見レバ，音ノ空中ヲ傳播スル速度ハ波浪進行ノ速度ヨリ遥カニ大ナル者ナルヲ以テ全ク洪浪ガ気仙南閉伊地方ノ沿岸ニ激スルノ音ナリシナルベシ，且ツ各地ニ於テ聞タル音響ノ回数ト洪浪ノ襲来ノ回数ト畧一致スル事，及ビ海洋遥カノ沖合ニ漁セシ者ハ多く其音響ヲ陸地ノ方位ニ聞ケリト云フヲ以テモ之ヲ證スルニ足ルベシ
此他陸前国石ノ巻，荻ノ濱，大原，雄勝，細浦等ニ於テ當日午後三時頃二回遠雷ノ如キ鳴響ヲ聞ケリト云ヘド，其區域モ三陸中南方ニ限リ浪勢モ亦弱キ地方ナレバ，若シ今回津浪ノ原動力ニ依テ起リタル音響トセバ此地方ノミ之ヲ聞クノ理ナカルベシ，當日ハ朝来ヨリ曇雨朦欝タル日ナリシヲ以テ或ハ真ノ雷鳴ナリシナランカ（伊木，pp. 9－10）．
［37］
●岩手縣報六月廿四日内務省宛
（抄録）本月十五日ハ天候朝来朦朧トシテ温度ハ八十度乃至九十度ヲ昇降シ平年ニ比ズレハ其暖キコト十度以上ニシテ人々大ニ困メリ然レトモ季節ノ不順ナルハ梅雨ノ常ニシテ殊ニ時恰モ旧暦端午ノ節ナルヲ以テ各町村落ニ於テハ或ハ親戚ヲ訪問シ相祝スルアリ或ハ友人相會シ宴飲スルアリテ各歓ヲ竭シツヽアリシカ暮夜ニ至リ数回ノ地震アリ又午後八時頃東閉伊郡沖合ニ於テ轟然一発巨砲ヲ放チタル如キ響音アリタレトモ沖合ノ鳴動ハ普通ノコト或ハ軍艦ノ演習ナラント信シ更ニ意ニ介スルモノアラサリキ然ルニ其轟音ノ歇ムヤ未タ数分間ナラサルニ海嘯俄ニ至リ狂瀾天ヲ衝キ怒濤地ヲ捲キ浩浩トシテ驀地押シ寄セ来リ市街トナク村落トナク総テ狂瀾汎濫ノ没スル所トナリ――
然ルニ當日沿海ヲ隔テ約二里ノ遠沖ニ漁獵セシ漁夫等ハ稍ヤ波浪ノ高キヲ覺ヘタルノミニシテ斯ル凶災ノアリシヲ知ラス陸地ニ到着シテ始メテ海嘯ノ被害ヲ知リタリト云フハ奇ト云フヘシ（震災，pp. 44－45）．
［38］
第一章　災害篇
第一　海嘯ノ景況
――
七（海嘯ノ音響）海嘯ノ来ルヤ其前凡ソ十分時（短キハ五分ト云ヒ長キハ五十分ナリト云フモノアリ）東方ニ當リ一種異様ノ大ナル音響ヲ聞クコト数回（二回ナリトモ云ヒ三回ナリトモ云フモノアリ）而シテ又其音響ハ人ニ依テ感スル所各異ナリト雖トモ約ネ左ノ数種ニ出テス
一，巨砲ヲ續發セルカ如シ
二，雷鳴ノ如シ
三，高山ノ崩ルヽカ如シ
四，強風ノ吹キ来ルカ如シ
五，数艘ノ汽船疾走シ来ルカ如シ
六，遠ク汽車ノ進行スルカ如シ

右ノ如ク各自ノ云フ所一様ナラスト雖トモ中ニ就キテ第一種ノ発砲ナリト思惟セルモノ最モ多ク雷鳴ナリトセルモノ之ニ次ク蓋シ當夜ハ陰雲四ニ塞カリ絶ヘス降雨アリシカ為メ斯クハ思惟セルモノナラン歟而シテ此音響ハ果シテ何處ヨリ来レルモノカ人或ハ地震ノ響ニテモアリシカ如ク想像シ之ヲ以テ海嘯ノ前兆トナスモノアリ然レトモ想フニ這ハ震響ニモアラス亦前兆ニモアラスシテ高浪空ヲ衝キ轟々戛々トシテ来リシ音響ニテ其中或ハ他ノ海岸ヲ衝キ汀涯ヲ崩シ屋舎ヲ壊リタル凄マシキ音響亦混同シタルナラン歟何トナレハ音響ノ回数ト海嘯襲来ノ回数ト畧ホ一致スルノミナラス海上ニ出漁セシ者ハ多ク其音響ヲ陸地ノ方面ニ聞ケリト云フヲ以テ之ヲ證スヘケレハナリ而シテ此音響ハ縣下各郡ヲ通シテ巨砲ヲ放テルカ如キ一種ノ鳴動ヲ感セシメタルノミナラス遠ク山形秋田ノ地方ニテモ之ヲ聞ケリト云フ（宮城，pp. 15－17）.